岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 95

土師東遺跡
福里遺跡

干田川改修に伴う発掘調査

1994

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 95

土師東遺跡
福里遺跡

干田川改修に伴う発掘調査

1994

岡山県教育委員会

序

干田川は、長船町を東西に貫く悪水抜きの水路であり、長船町の産業に重要な役目を果たしている河川であります。しかし、平成２年の台風19号によって生じた氾濫を期に、その排水機能が改修されることになりました。

岡山県教育委員会では、干田川改修工事に先立ち、その予定地内に所在する土師東遺跡と福里遺跡の保護・保存について関係当局と繰り返し協議及び調整を図り、河川という構造上やむを得ない場所について、記録保存の処置を講ずるための発掘調査を実施しました。

この報告書では、土師東遺跡と福里遺跡の発掘調査について記載しております。遺構の遺存状態は悪く、一部削平もされてはいましたが、弥生時代後期の溝や土壙が見つかり、周囲には集落遺跡の存在が予想されるなど、一定の成果を得ることができました。この報告書が今後の地域史解明の資料として、また文化財保護の一助として活用されるならば望外の幸いです。

最後ではありますが、発掘調査の実施、報告書の作成に当たっては、岡山県文化財保護審議会委員の先生方をはじめ、岡山地方振興局、長船町、長船町教育委員会、土地所有者等関係各位から御指導と御尽力を賜り、ここに感謝の意をあらわすものであります。

平成６年11月

岡山県教育委員会
教育長　森　崎　岩之助

例　　言

1．本書は、邑久郡長船町内の干田川河川改修工事に伴い、岡山地方振興局の委託により岡山県古代吉備文化財センターが実施した「福里遺跡」および「土師東遺跡」の発掘調査報告書である。

2．両遺跡は、邑久郡長船町福里・土師に所在する。

3．発掘調査は、岡山県古代吉備文化財センター職員正岡睦夫・槙野芳典・氏平昭則・物部茂樹・岡本泰典が担当して平成５年９月１日から同年11月24日まで実施し、その後12月20日まで現地事務所で整理作業を行った。なお調査面積は3,744㎡である。

4．発掘調査にあたっては、岡山県文化財保護審議会委員の近藤義郎・水内昌康の両氏から御指導・御助言をいただいた。

5．報告書作成に際しては、下記の方々から有益なご教示・ご助言をいただいた。

伊藤　晃・岡本寛久・亀山行雄・桑田俊明・下澤公明・杉山一雄・高畑知功・平井　勝
平井泰男・福田正継・松本和男・柳瀬昭彦　（五十音順、敬称略）

6．発掘調査・遺物整理にあたり、地元有志の方々のご参加・ご協力を得た。

発掘作業員

浦上繁子・岡崎　弘・岡田文子・葛城敬子・川本敬子・小山光代・谷本秀吉・富岡道子
延原　公・福池絹子・三宅史郎・宮本麻利子・森　柾夫

整理作業員

石原敬子　（五十音順、敬称略）

7．出土遺物の実測・トレースには氏平・岡本があたり、遺物写真は岡本が撮影した。

8．本書の執筆は氏平と岡本が担当し、章末に文責を記した。

9．本書で使用した高度値は海抜高、方位は第５図が真北、その他は磁北である。

10．本文中の遺物観察表に用いた単位は、法量をcm、重量をｇに統一した。

11．本書第２図には国土地理院発行の1/50,000地形図「和気」を、第５図には岡山地方振興局の工事用地形図（1/1,000）を、それぞれ改変して使用した。

12．報告書に関係する出土遺物、実測図、写真等は、岡山県古代吉備文化財センターにおいて保管している。

目　次

序
例言
目次
第１章　地理的・歴史的環境…… 1
第２章　調査の経緯…… 3
第３章　発掘調査の概要
　第１節　福里遺跡…… 7
　第２節　土師東遺跡…… 22
第４章　まとめ…… 26

図目次

第１図　遺跡位置図（1/2,000,000）…… 1
第２図　周辺遺跡分布図
　（1/50,000）…… 2
第３図　立会調査時検出土壙　平面・断
　面図（1/40）…… 4
第４図　立会調査時　出土遺物
　（1/4）…… 4
第５図　福里遺跡・土師東遺跡　調査区
　配置図（1/2,000）…… 5～6
第６図　福里１区　全体図（1/500）…… 7
第７図　福里１区　遺構配置図
　（1/200）…… 8
第８図　福里１区　調査区土層・溝断面図
　（1/40）…… 9
第９図　福里１区　河道断面図
　（1/60）…… 10
第10図　福里１区　包含層出土遺物①
　（1/4）…… 12
第11図　福里１区　包含層出土遺物②
　（1/4）…… 13
第12図　福里１区　包含層出土遺物③
　（1/2）…… 13
第13図　福里２区　全体図（1/500）…… 14
第14図　福里２区　調査区土層断面図
　（1/40）…… 14
第15図　福里３区　全体図（1/500）…… 15
第16図　福里３区　調査区土層断面図
　（1/40）…… 15
第17図　福里３区　出土遺物（1/2）…… 15
第18図　福里３・４区間　水門設置箇所
　法面土層断面図（1/60）…… 15
第19図　福里４区　全体図（1/500）…… 16
第20図　福里４区　溝１平面・断面図
　（1/200，1/40）…… 16
第21図　福里４区　溝１出土遺物
　（1/4，1/2）…… 17
第22図　福里４区　溝２・河道平面図
　（1/200）…… 17
第23図　福里４区　溝２断面図
　（1/40）…… 17
第24図　福里４区　溝２出土遺物
　（1/4）…… 18
第25図　福里４区　河道断面図
　（1/60）…… 19
第26図　福里４区　河道出土遺物①
　（1/4）…… 20
第27図　福里４区　河道出土遺物②
　（1/4）…… 21
第28図　福里４区　柵列状遺構（1/200）・
　出土遺物（1/4）…… 22
第29図　土師東１区　遺構配置図
　（1/200）…… 22
第30図　土師東１区　調査区土層断面図
　（1/40）…… 23
第31図　土師東１区　溝１・２断面図
　（1/40）…… 23
第32図　土師東１区　溝１出土遺物
　（1/4）…… 23
第33図　土師東２区　全体図（1/500）…… 24
第34図　土師東２区　調査区土層断面図
　（1/40）…… 24

第35図　土師東３区　全体図（１/500）…… 24
第36図　土師東３区　調査区土層断面図
（１/40）…… 25
第37図　土師東３区　溝１断面図
（１/40）…… 25
第38図　土師東４区　全体図（１/500）…… 25
第39図　土師東４区　調査区土層断面図
（１/40）…… 25

図版目次

図版１　（上）福里１区　河道西岸と溝１、溝４～６（東から）
（中）福里１区　河道東岸と溝７～９（南から）
（下）福里３区（東から）
図版２　（上）福里４区　柵列状遺構（北から）
（中）福里４区　溝２（北から）
（下）福里４区　溝２断面（西から）
図版３　（上）福里４区　河道（東から）
（中）福里４区　河道出土遺物（西から）
（下）福里４区　溝１（北から）
図版４　（上）福里４区　溝１断面（南から）
（中）土師東１区（東から）
（下）土師東３区（東から）
図版５　試掘時出土遺物・福里１区包含層出土遺物(1)
図版６　福里１区包含層出土遺物(2)
図版７　福里４区溝２出土遺物・福里４区河道出土遺物(1)
図版８　福里４区河道出土遺物(2)

第１章　地理的・歴史的環境

土師東遺跡、福里遺跡が所在するのは、現在の長船町のほとんどを含む平野の南縁部である。この平野は、西を吉井川に遮られ、北・東・南を高山、西大平山・東大平山、甲山・桂山といった100m～300mの高さの山に囲まれている。平野の起伏は非常にゆるやかで、平野の西を香登川が南流し、平野を貫いて干田川が西流している。干田川はこの平野の水田開発に伴い、排水を目的として掘削されたものといわれている。現在は甲山北嶺まではほぼまっすぐに流れているが、もともとは現在の長船中学校のあたりから南に曲がり、宮下集落から北西に向かい、切戸で再び南西に方向を変えていたようで、元禄三年に改修され現在の流路となったという記録がある[1]。

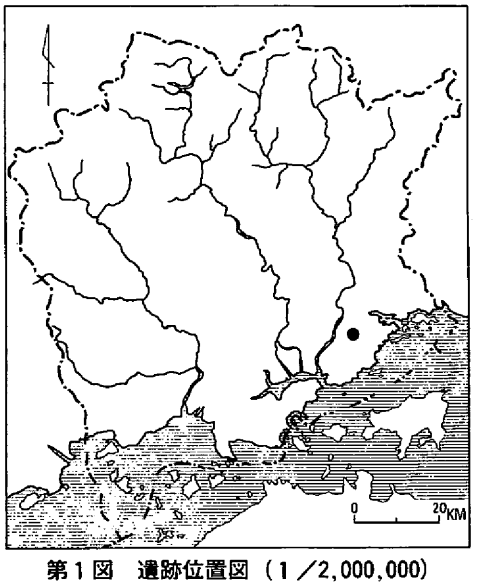
土師東・福里遺跡の周囲の集落の遺跡は、山麓に近い平野の南縁部あるいは北縁部に立地する。これは、現在の平野の中心部がかつては湿地帯で、生活に適していなかったためであろう。この事は、東須恵のあたりの小丘陵に「島」という地名が残ることからもうかがえる。

土師東・福里遺跡の周囲では、縄文時代の遺構は知られていない。弥生時代に入ると人々の足跡が見られるようだが、発掘調査で確認している例として、木鍋山遺跡[2]と丸山遺跡[3]がある。

長船町には多くの前方後円墳が存在する。福里遺跡の東に位置する牛文茶臼山古墳は、帆立貝形で墳長約55m、後円部中央に竪穴式石槨を有し、そこから画文帯神獣鏡１面など装身具・武具・馬具が出土した[4]。花光寺山古墳は墳長約90m、後円部中央に組合式長持形石棺と小石室を有し、北小石室から三角縁神獣鏡１面など装身具・武具・工具が出土した[5]。これらを始め吉井川下流域の大型古墳は従来から岡山南部平野における政治史研究の対象として注目を集めている[6]。

土師東・福里遺跡の南の山麓には、山頂部に甲山古墳群、土師茶臼山古墳群が、平野との比高差が10m程度の斜面に桂山蟋（きりぎりす）古墳群、比丘尼岩古墳群が立地する[7]。

甲山古墳群は主体部が竪穴式石室、箱式石棺からなる５基の古墳群である。土師茶臼山古墳群も竪穴式石室・箱式石棺を持つ円墳10基からなり、中でも最大の土師茶臼山古墳は造り出し付きの円墳で直径約20mである。福里遺跡南東の桂山蟋古墳群は、古墳時代後期の群集墳で、丘陵先端部に位置する馬塚古墳の他５基が確認されている。福里遺跡南の谷部東岸に位置する比丘尼岩１・２号墳は詳細は不明である。



第１図　遺跡位置図（１／2,000,000）

古代の寺院として、長船町内には服部廃寺と須恵廃寺がある。須恵廃寺が白鳳時代初期の創建とされ、少し遅れて白鳳時代中期に服部廃寺など邑久郡の各寺が創建される[8]。服部廃寺では保存のための発掘調査が行われており、金堂・講堂・回廊が存在し、築地・溝による区画が判明している[3]。

長船町には窯跡も多い。木鍋山遺跡でも窯跡が１基確認されている[2]が、数の多いのは土師東・福里遺跡の北東側の山麓などに存在するいわゆる邑久古窯跡群である。古墳時代後期から平安時代末期まで生産が続けら

れ、発掘された例もある[9]。

中世では、『一遍上人絵伝』に描かれ、吉井側下流域の貿易港として栄えた福岡の市が有名である。その推定地として長船町福岡（備前福岡遺跡）が挙げられている。しかし、遺跡の実態は未だ不明であり、今後の発掘調査が待たれるところである。近世においては、先述の干田川の改修事業が行われ、現在の景観に近づいていくのである。しかし、干田川は現在に至ってもなお洪水を引き起こし、ついに今回抜本的対策が講じられることとなった。　（氏平）

註

(1)　『邑久郡史』上巻　第２編第１章地誌　２川附池沼　P44　1953年

(2)　江見正己「木鍋山遺跡発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告』11、12　岡山県教育委員会　1981、82年

(3)　『服部廃寺跡発掘調査現地説明会資料』　長船町教育委員会　1993年

(4)　平井　勝「牛文茶臼山古墳」『前方後円墳集成　中国・四国編』　P257　山川出版社　1991年

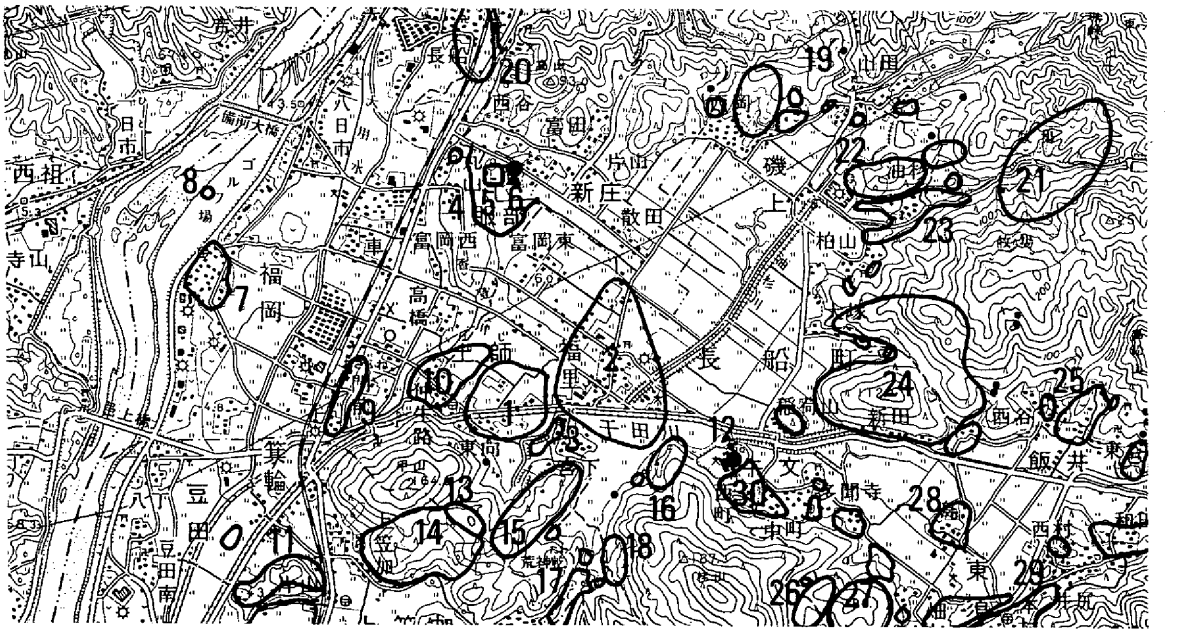
(5)　平井　勝「花光寺山古墳」『前方後円墳集成　中国・四国編』　P270

(6)　最近の研究として、弘田和司・古市秀治・森　宏之「岡山県吉井川流域における古墳の展開（上）」　『古代吉備』第14集　1992年　が挙げられる。

(7)　『長船町埋蔵文化財分布地図』　長船町教育委員会　1987年

(8)　伊藤　晃「初期寺院と瓦」『吉備の考古学』　福武書店　1987年

(9)　伊藤　晃・川崎　務『新林（宮嶋）窯址の調査報告』　邑久町教育委員会　1974年、葛原克人『奥更谷古窯址の調査報告』　邑久町教育委員会　1975年、山磨康平ほか『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告27　寒風古窯址群』　岡山県教育委員会　1978年



第２図　周辺遺跡分布図（１／50,000）

１．土師東遺跡　２．福里遺跡　３．木鍋山遺跡　４．丸山遺跡　５．服部廃寺　６．花光寺山古墳
７．備前福岡遺跡　８．福岡奥之城　９．土師細工原遺跡　10．土師遺跡　11．片山上古墳群
12．牛文茶臼山古墳　13．甲山古墳群　14．上笠加古墳群　15．土師茶臼山古墳群
16．桂山蟋(きりぎりす)古墳群　17．大谷口遺跡　18．比丘尼岩古墳群　19．宮ノ屺窯跡　20．長船遺跡
21．油杉窯跡群　22．油杉古墳群　23．油杉遺跡　24．大塚古墳群　25．飯井西谷遺跡
26．桂山・十二ケ屺古墳群　27．桂山・畑山古墳群　28．島遺跡　29．東須恵遺跡　30．牛文遺跡

第２章　調査の経緯

(1)　調査の契機

干田川はその流量の割に川幅が狭いため流水保持能力に乏しく、増水の際にはしばしば洪水を起こし周辺の人家や耕地に甚大な被害をもたらしてきた。平成２年の台風19号による水害を契機として、岡山県は激甚災害対策班を設置し、河川改修工事を実施することとなった。工事の概要は、川幅を現在の２倍程度に拡幅して保水能力を確保し、増水時の災害防止を図るというものである。

着工にあたり、予定地が周知の遺跡である土師茶臼山古墳群の所在する木鍋山の丘陵の突端部にかかることから、平成３年３月７日に岡山県教育委員会あてに通知があった。これを受けて県教委では『岡山県遺跡地図』をもとに協議を行い、丘陵突端の東西に遺跡はないものと判断し、土師茶臼山古墳群に関してはこれに影響の生じないよう慎重に実施されたい旨の条件を付して、着工を認めたため、平成４年４月より改修工事が開始された。

ところがその後、長船町教育委員会からの県教委への連絡により工事箇所が福里・土師東両遺跡の範囲に該当することが判明した。両遺跡は『岡山県遺跡地図』には掲載されていないが、長船町が昭和59・60年度の試掘調査によって範囲を確認し、同町発行の遺跡地図にも収録されていたのである。そこで平成５年４月、県教委と町教委が福里地区にて工事の立会調査を行ったところ、包含層や遺構の存在が確認された。この事態を受け、県教委は振興局と再び協議を重ね、遺跡相当部分の工事を一時中断し、全面調査を実施することに決定し、急遽平成５年９月１日より調査に着手した。

(2)　調査体制

岡山県教育委員会文化課

課　　長	渡辺淳平
課長代理	松井新一
課長補佐（埋蔵文化財係）	高畑知功
主　　査	時長　勇
文化財保護主事	亀山行雄

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長	横山常實
次　　長	葛原克人
総務課長	北原　求
調査第一課長	正岡睦夫（調査担当）
文化財保護主任	槙野芳典（調査担当）
文化財保護主事	氏平昭則（調査担当）
主　　事	物部茂樹（調査担当）
主　　事	岡本泰典（調査担当）

(3)　発掘調査の経過

発掘調査は、工事の性格上緊急を要するのと、豊富な遺構・遺物の存在が予想されたため調査員５名で対応し、年度末までの終了が見込まれていた。調査対象地は福里・土師東遺跡内の干田川南岸に各４カ所、工事により10m幅で掘削された部分で、それぞれ福里１～４区、土師東１～４区と命名し、東端の福里１区から順に調査を実施することとした。

福里１区を除いては基盤層までの覆土がほとんど除去されていたので、調査は基盤層上面での遺構検出と壁面での堆積状況の観察に主眼を置いた。最初に調査した福里１区では基盤直上の遺構はまったく検出されず、遺構密度は概して低く、遺物の量も少ないことが判明した。他の調査区も状況は同様で、そのため近接する調査区での作業の同時進行も可能となり、調査は予想を遥かに上回るペースで進展した。結果、当初の予定期間は大幅に縮まり、11月24日をもってすべての作業を終え、その後

12月20日まで現地事務所にて遺物の整理作業を行うことができた。

(4)　日誌抄

平成５年

９月１日	福里遺跡１区調査開始	11月５日	土師東遺跡２区調査開始
10月６日	福里遺跡２・３区調査開始	11月９日	土師東遺跡１区調査終了
10月７日	福里遺跡１区調査終了		土師東遺跡３区調査開始
10月12日	福里遺跡４区調査開始	11月15日	土師東遺跡４区調査開始
10月20日	福里遺跡２・３区調査終了	11月20日	土師東遺跡２区調査終了
11月１日	土師東遺跡１区調査開始	11月22日	土師東遺跡３区調査終了
11月２日	福里遺跡４区調査終了	11月24日	土師東遺跡４区調査終了

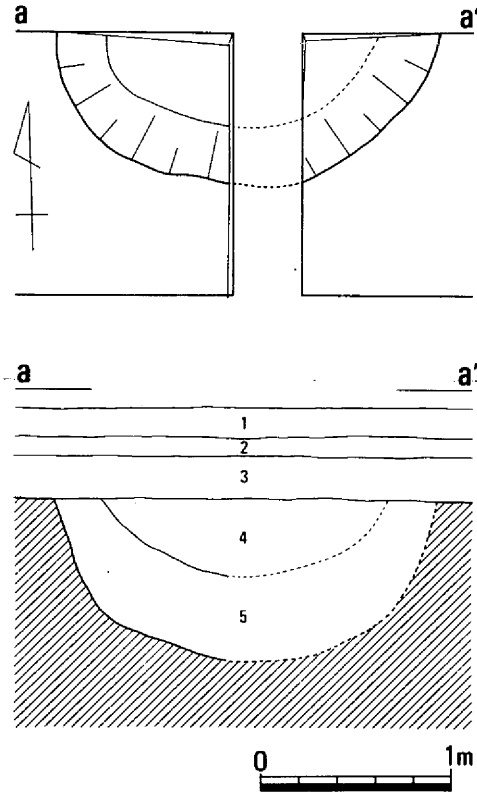
(5)　立会調査報告

立会調査は、今回の発掘調査区の南側で、干田川に平行して走る幅１ｍほどの水田用水路を掘削した際に行われた。遺構が見られたのは福里１区付近である。

検出された遺構は南北に走る溝３条と土壙１基である。土壙（第２図）は、南半分のみ検出したが本来の形状は円形と思われる。出土した土師器から、時期は古墳時代初頭に比定される。

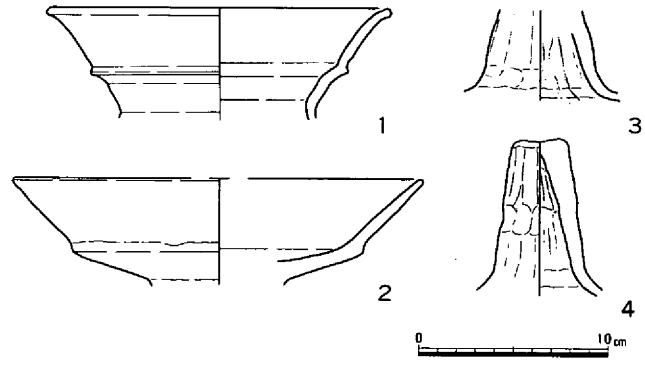
第３図は立会調査時の出土遺物である。１の壺と２・３の高坏は土壙出土、４の高坏は溝からの出土。

また、土師東遺跡調査中の11月８日に福里１区の東側で掘削工事に伴う立会調査を実施したが、遺構・遺物は確認されなかった。福里・土師東両遺跡の基盤層である黄褐色粘質土も認められず、暗褐色土が厚く堆積している状況であった。このことから考えて、福里１区は微高地の縁辺部に近く、おおむね福里遺跡の東端に相当するとみられる。　（岡本）



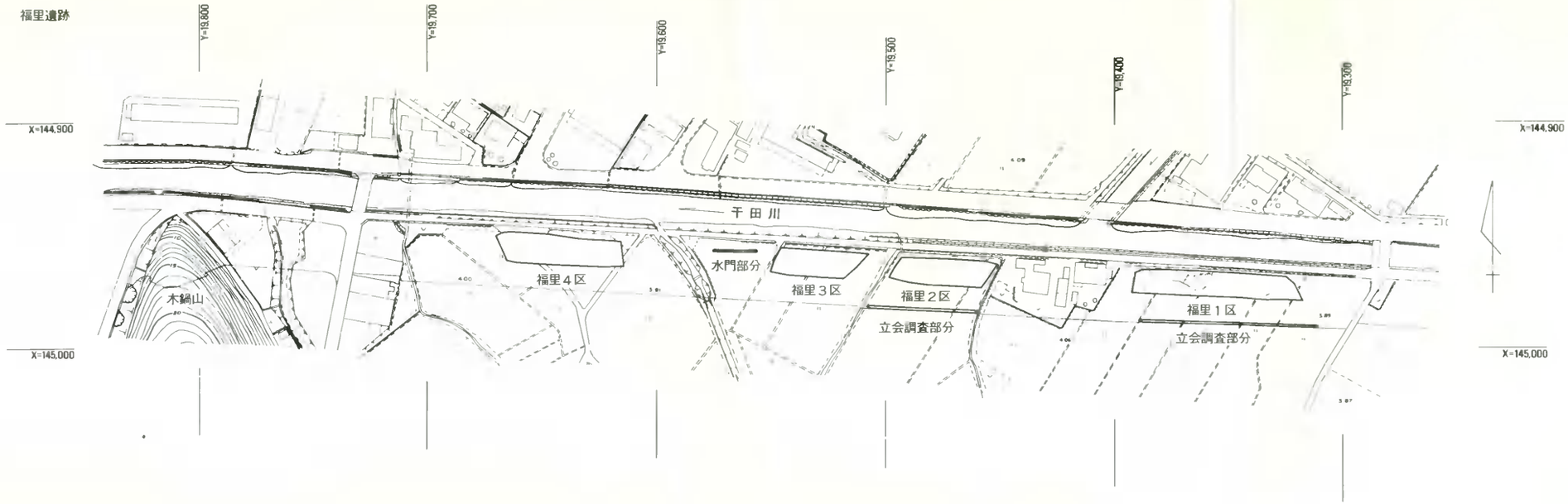
１．現代耕作土　　４．暗褐色土（土壙埋土）
２．灰褐色土　　５．褐色土（　〃　）
３．灰褐色土

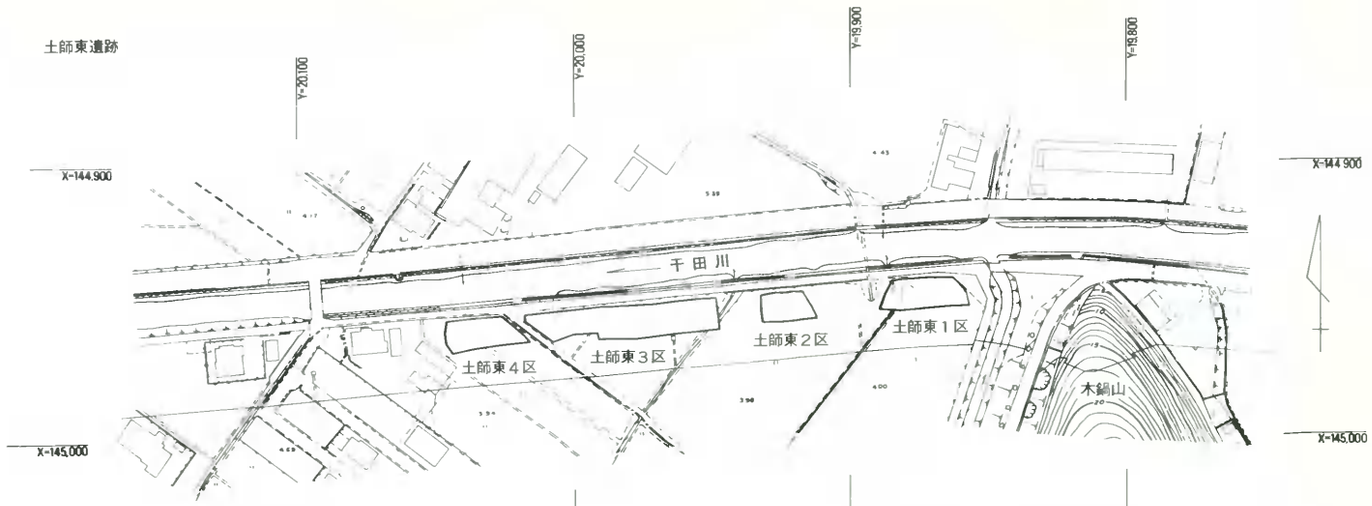
第３図　立会調査時検出土壙平面・断面図（１／40）



第４図　立会調査時出土遺物（１／４）

番号	口径	器高	底径	形態・手法の特徴	色調	胎土
1	12.8				淡赤褐色	0.5～２㎜程度の長石・石英・雲母
2	21.4				黄灰褐色	0.1～１㎜程度の長石・石英・雲母粒
3					黄茶褐色	0.1～１㎜程度の長石・石英粒
4				焼成不良。	淡黄茶褐色	0.2～５㎜程度の長石・石英粒





第５図　福里遺跡・土師東遺跡　調査区配置図（１／2,000）

第３章　発掘調査の概要

第１節　福里遺跡

(1)　福里１区（第６・７図）

今回最も東側（上流側）に設定した東西約64mの調査区である。前述した土壙や溝の検出された立会調査部分の北側にあたり、良好な状態での包含層や遺構の存在が予想されていた。調査の結果、東半部で自然河道、その両岸に多数の溝、西端部で古代から中世にかけて形成された包含層を確認した。以下個々の遺構について、西半部から順次説明を行う。

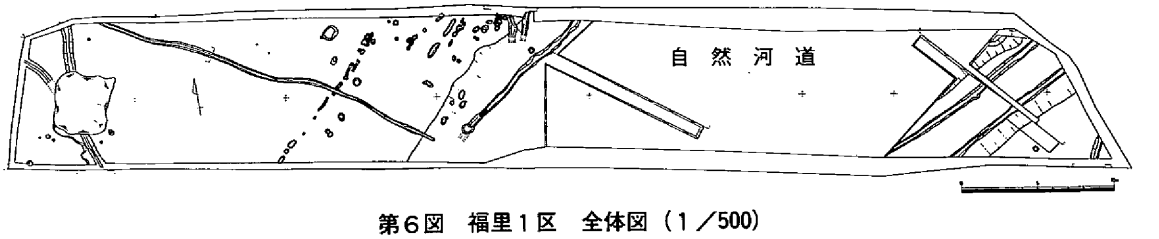
包含層　調査区西端部で検出された、基盤の黄褐色粘質土直上にのる暗茶褐色粘質土層で、多量の遺物を含む。この層は若干色調を異にしつつも福里・土師東両遺跡全域にわたって存在するが、まとまった遺物の出土をみたのは本区だけである。遺物は奈良時代から鎌倉時代にまでおよび、そのうち量的には奈良から平安前期の須恵器が最も多い。この層の上面から後述する溝１・２・３が掘削され、また礫や近世以降の瓦・陶磁器片の詰まった暗渠が数条南北に走っていた。なお遺物については項を改めて説明する。

溝１（第８・９図）　調査区西半部を北西から南東に流下する溝で、約24mにわたって検出した。本来は包含層上から掘り込まれたものであるが、実際に検出しえたのは基底部のみである。検出面（基盤層上面）での幅は最大40cm、深さ20cm程度である。壁面では後世の暗渠によって撹乱され、断面観察はできなかった。埋土中から縄文土器・弥生土器・須恵器の小片がわずかに出土したが図示しうるものではない。溝の年代は中世以降であることは確実だが、遺物による時期の特定はできない。この状況は本区の他の溝でも同様である。

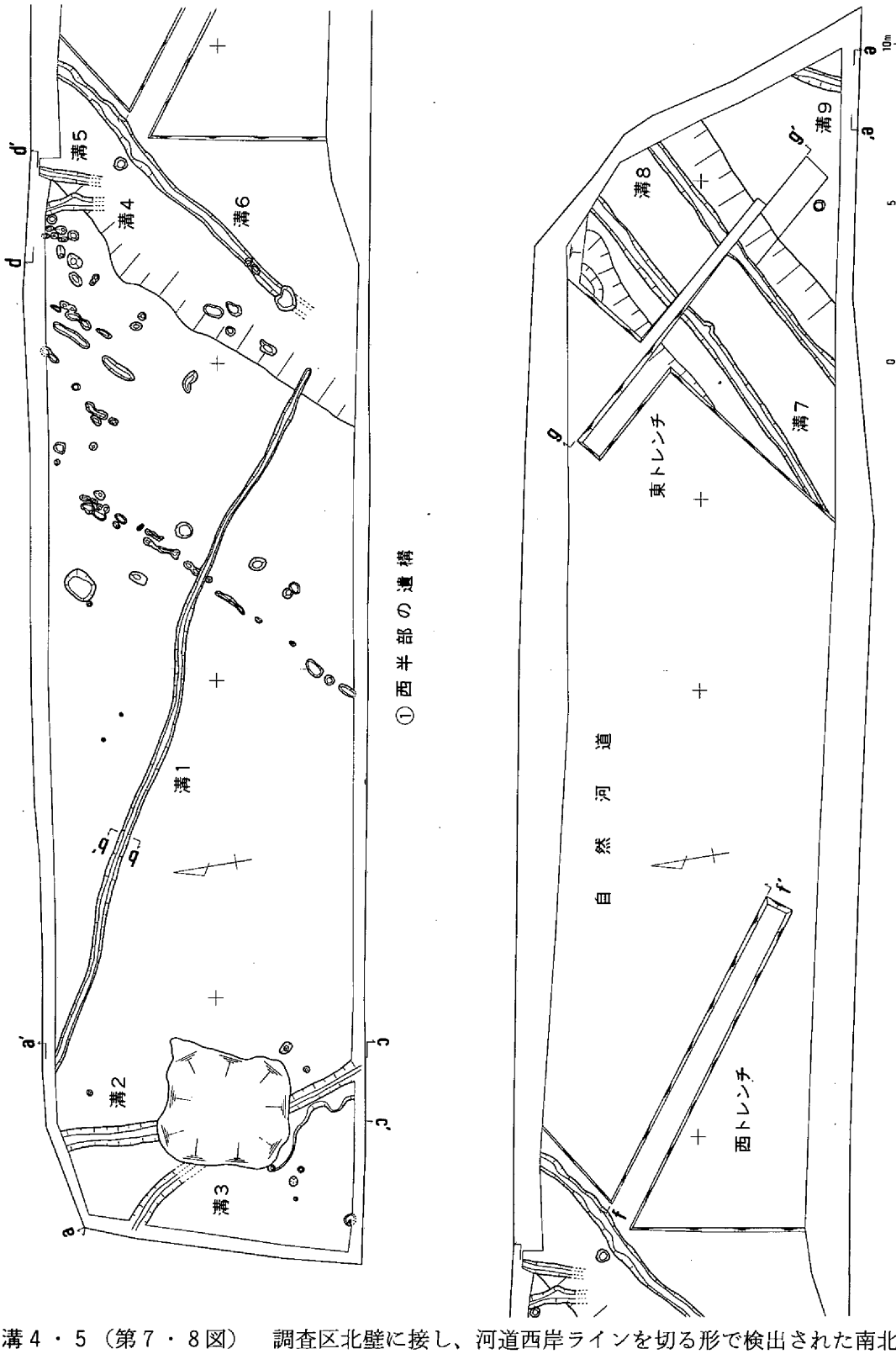
溝２（第７・８図）　調査区の西端近くで検出したほぼ南北に走る溝で、南半分は現代の撹乱で破壊されている。包含層上面での幅約1.5m、深さ約30cmを測る。南流し、撹乱部分で溝３と合流していたと思われる。遺物は、弥生土器の小片が１点出土したにすぎない。

溝３（第７・８図）　調査区の北西隅付近から発し、南に抜ける溝である。包含層上面での幅約80cm、深さ約40cmで、断面はＶ字状を呈する。撹乱部分より南では西側に拡張するようにも見えるが（第８図③）、別の遺構が重複している可能性もあり、現状ではいずれとも決めがたい。埋土中から縄文土器片（前期・晩期）が出土した。

以上の３条の溝は若干の遺物は出土したものの、明確な時期・性格は不明である。敢えて推測するなら中世以降の耕作に関連する遺構とも考えられる。



第６図　福里１区　全体図（１／500）



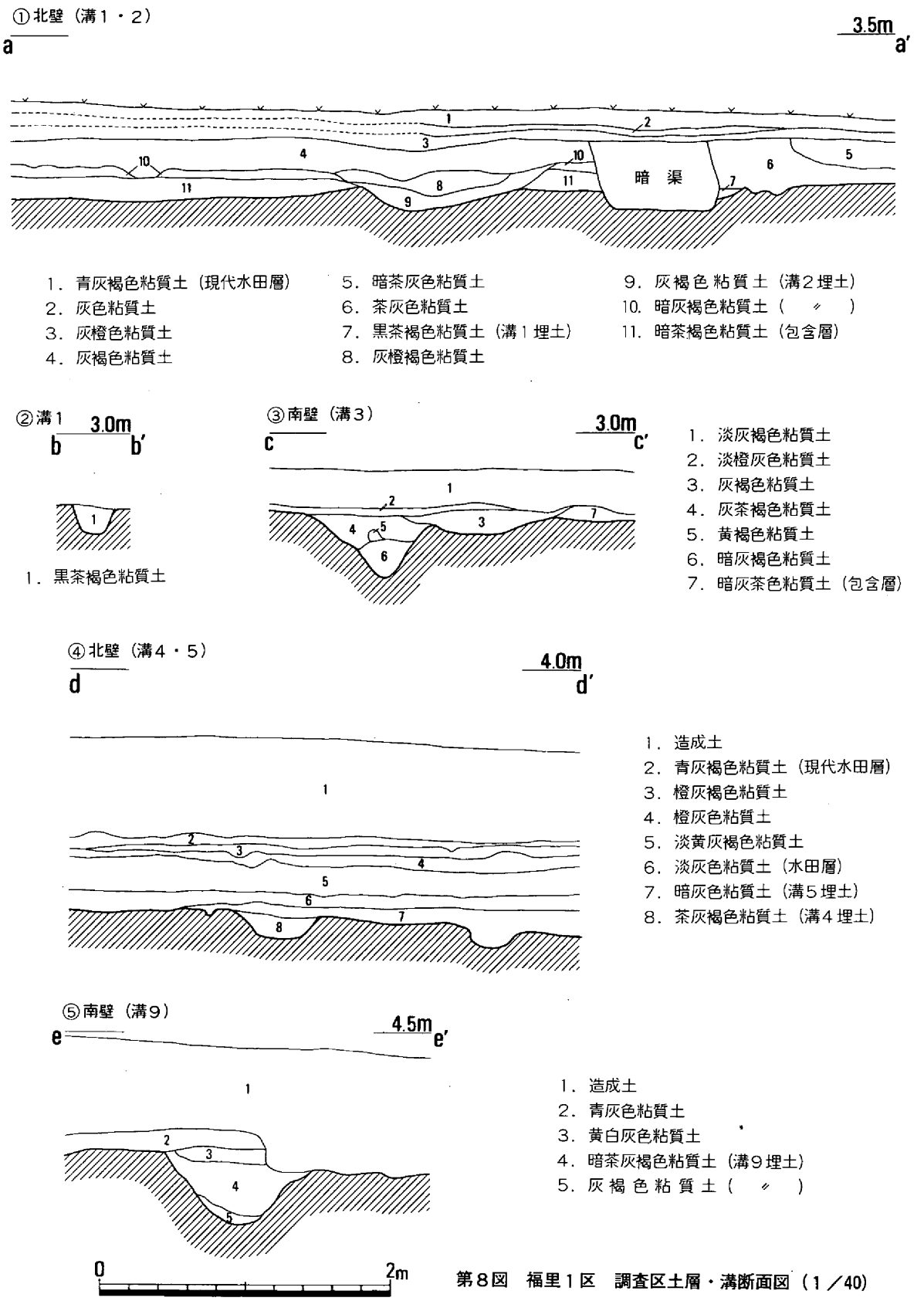
①西半部の遺構

②東半部の遺構

第７図　福里１区　遺構配置図（１／200）

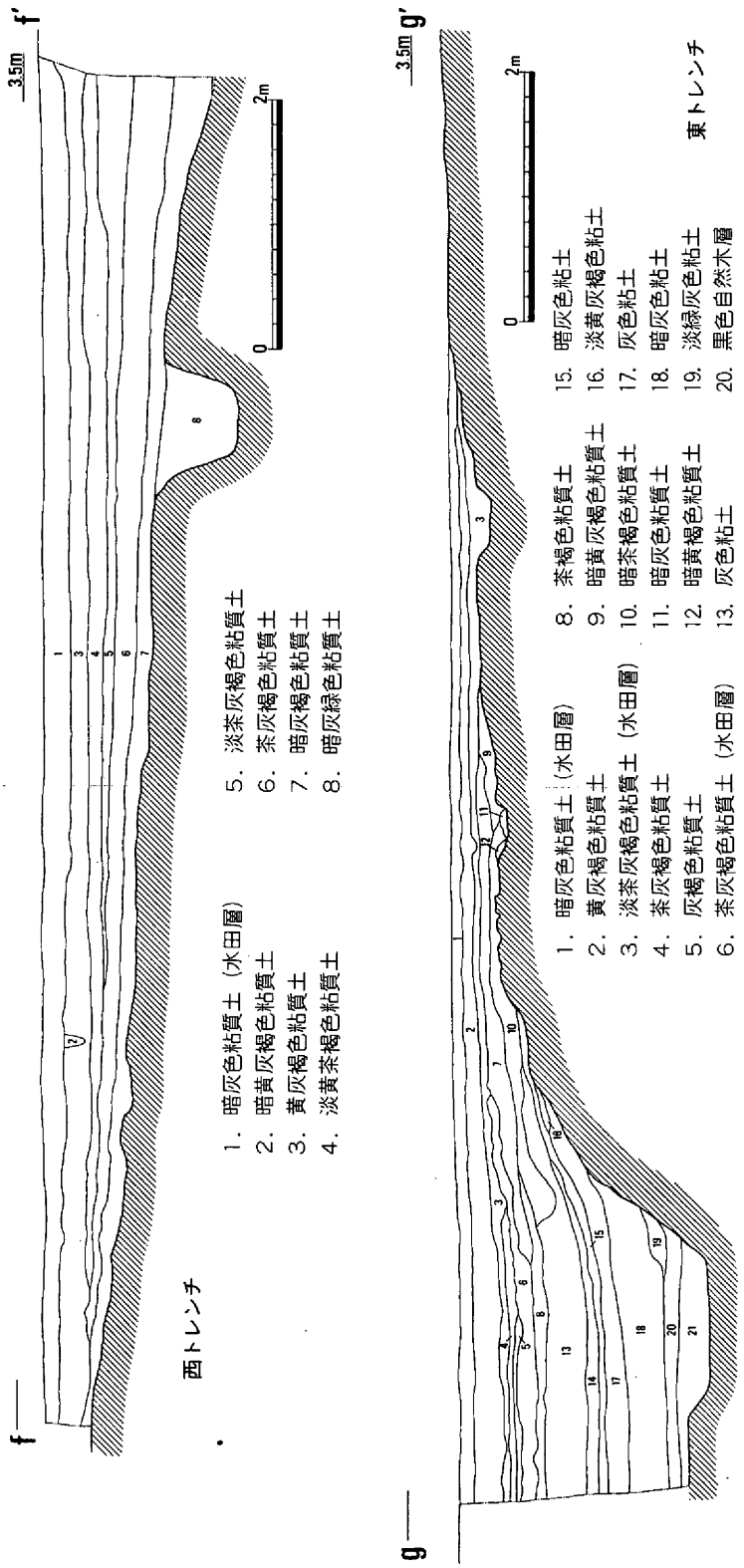
溝４・５（第７・８図）　調査区北壁に接し、河道西岸ラインを切る形で検出された南北方向の２条の溝である。幅は40～50cm、深さ10cm程度を測る。河道の埋没後に掘削されたものだが残存状態は悪く、北壁からわずか1.8m弱追えたのみで、遺物も全く出土していない。

溝６（第７図）　河道西岸ラインより2.5mほど内側を流れる溝で、流路は河道とほぼ平行する。幅は最大50cm、深さは10cm程度を測り、流走方向は南西から北東と思われる。埋土中から遺物の出土はなかった。



第８図　福里１区　調査区土層・溝断面図（１／40）

自然河道（第７・９図）　調査区東半部で検出した自然河道である。河底および埋土中の遺構・遺物の有無を確認するため東西両岸にトレンチを設定した。便宜的に西岸のトレンチを西トレンチ、東岸のそれを東トレンチと呼称する。



第９図　福里１区　河道断面図（１／60）

河道の幅は両岸ライン（傾斜変換部）間で28～30ｍを測る。ただし、埋土の上層部にこの河道の埋没が進行した段階で営まれた水田層が３枚程度認められるので、実際に流水のあった時期には川幅は現状よりかなり狭かったと推測される。土砂堆積の進行とともに幅を増し、上層では湿地化して水田耕作が行われていたのであろう。従って、本来の川幅は東西数ｍずつ内側に寄ると考えられる。また調査範囲が限られているため流下方向も断定し難いものの、周辺の地形を考慮すれば南西から北東とみるのが妥当であろう。

東西トレンチの状況を比較すると、埋土上半部は水田層をはさんで褐色系の粘質土が中心であり、下半になると灰色系の粘土が主体となる点は両者とも共通で、これが基本的な傾向と見てよい。しかし西トレンチでは河底に至る傾斜がかなり緩やかなのに対し、東では急角度で落ち込んでいる。流水が北方へと方向を転じ、東岸の浸食がより促進された結果とも考えられる。

なお、西トレンチの河底には暗緑灰色粘土の詰まった窪みが認められるが自然地形と思われる。また埋土中から遺物の出土はなかった。

溝７・８・９（第７・８図）

河道の東岸部を走る３条の溝で、７・８は河岸とほぼ平行、９はやや南に振り、流下方向は決定しがたい。断面観察のできた溝９の幅は約１ｍ、深さは約40cmである。どの溝からも遺物は出土していない。溝４～９は出土遺物もなく、やはり時期・性格は明確にできない。ただ７・８のように明らかに水田面と同時期のものがあり、河道埋没後の水田耕作に伴う遺構としておくのが穏当であろうか。

これらの遺構のほか、河道の西側に円形～長円形の浅い窪みが多数見られたが、その大部分は樹根ないし溝の基底部の痕跡と判断される。

包含層出土遺物　（第10～12図）

遺物は包含層および溝１・２・３より出土している。しかし溝の遺物については細片で図示できないため、ここでは包含層遺物のみをとりあげる。

西端部の包含層からはコンテナ５箱分の遺物が出土した。その内容は奈良・平安時代の須恵器を中心として多岐にわたるが、そのうち39点を古代・中近世・石製品に分けて説明したい。

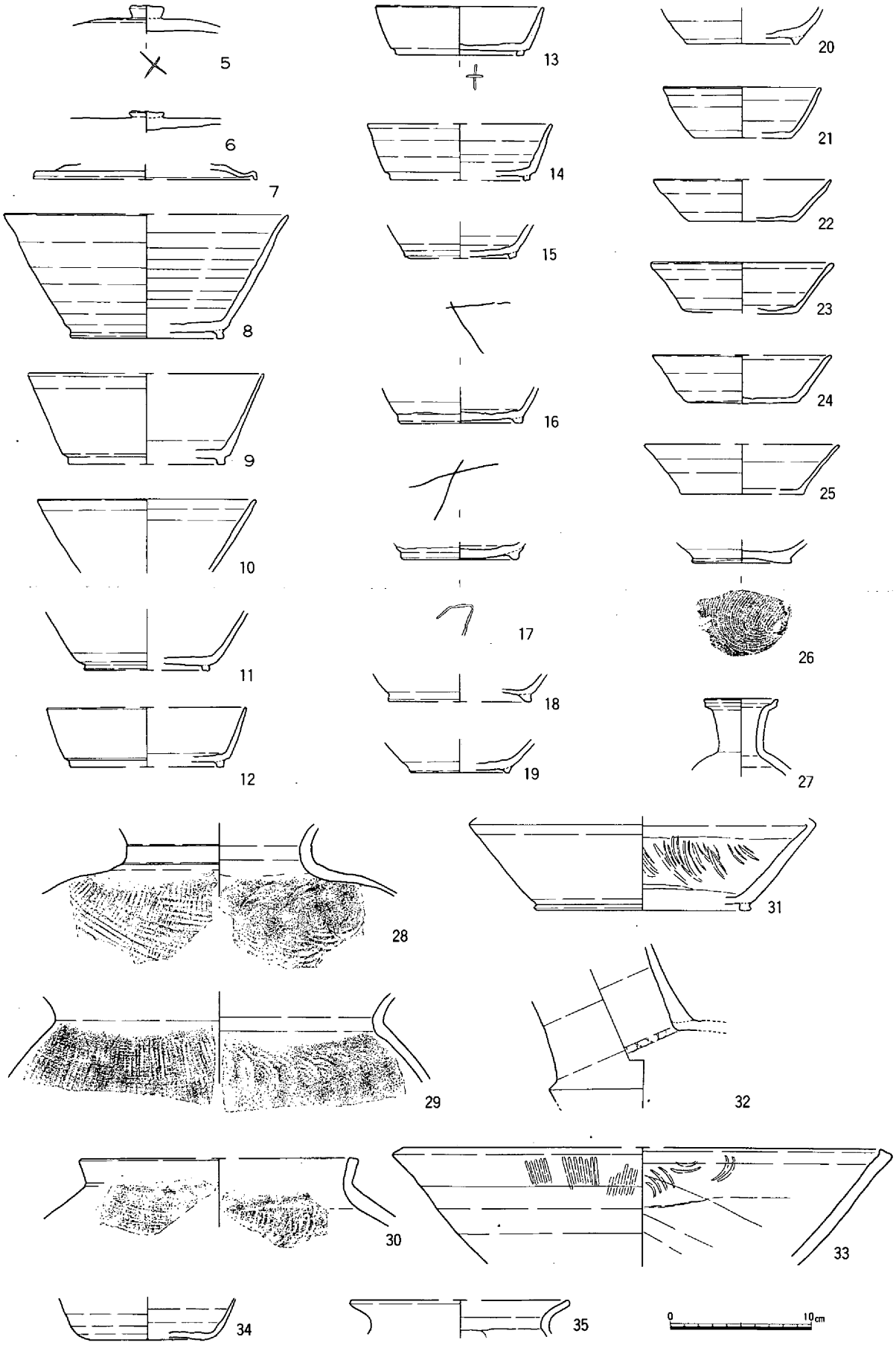
①古代の遺物（第10図）　５～33は須恵器である。５～７は坏蓋で、出土量は少ないがいずれも頂部に宝珠つまみが付くものである。５の内面には「×」状のヘラ記号が認められる。６の宝珠つまみはかなり偏平化が進行している。８～26は坏身である。出土点数は多く、各種の形態のものを含む。８～20は高台を有するものである。そのうち８～11は口径に比して深い体部をもつ。特に８はその容積で他個体を凌ぐ。12～14は口径と器高の比が３：１程度であり、13は底部外面に「×」状のヘラ記号を有する。15～20は底部付近のみ残存する破片で全形を復元することはできない。16と17の見込には「×」状の記号が細線で刻まれている。17の底部外面には現状では「∨」状を呈するヘラ記号があるが欠損のため本来の形状は不明である。21～25は高台をもたないものである。23は比較的残存率が高く、ほぼ原形を窺えるまでに復元しえた。外面には「火だすき」状に変色をおこした部分がある。25は焼成が甘く、土師器に近い色調である。26は底部外面に回転糸切り痕をとどめ、今回出土の須恵器中では最も新相を示す。

27～33は坏以外の各種須恵器である。27は小型の壺で、頸部は緩く外反し、口縁端部は上方につまみ出される。28は大型の壺の破片で、外面に格子状、内面に同心円状のタタキメが残る。29の短頸壺は外面をタタキののち横方向のカキメ調整で仕上げ、内面にはタタキメをとどめている。30は甕の頸部から肩部にかけての破片である。31・32は平瓶のそれぞれ体部と頸部である。31は内外面とも調整は粗く、内面はヨコナデが弱いためタタキメが残っている。32は遺存状態が悪く正確には復元しがたいが、推定通り平瓶とすればかなりの大形品となる。33は鉢で、内外両面はヨコナデで仕上げるが一部にタタキメを残す。

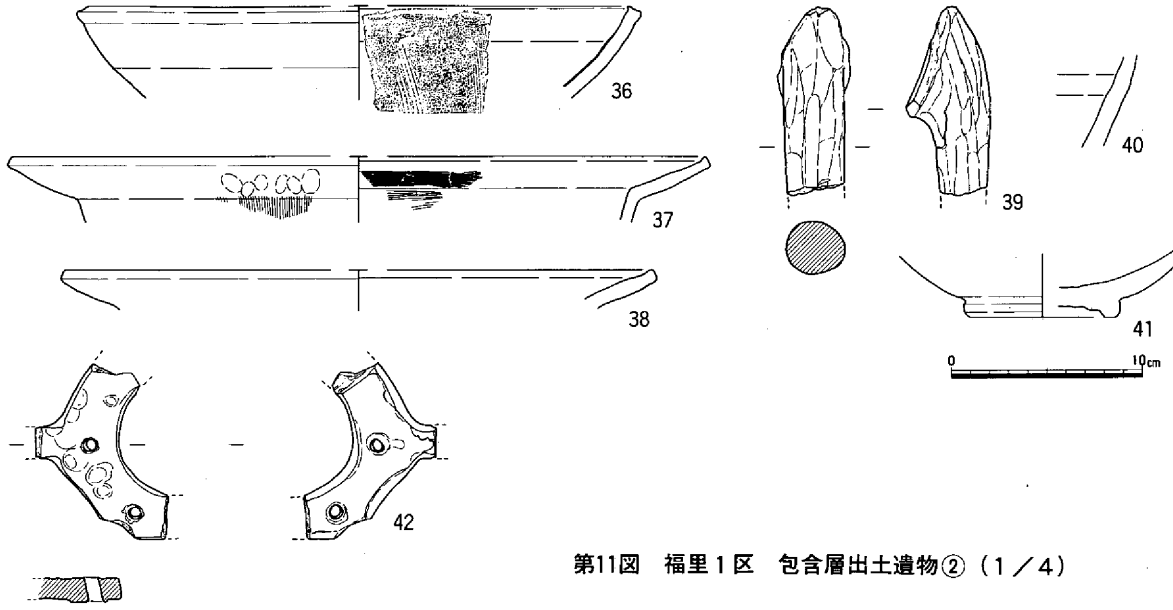
土師器は須恵器に比して出土数が少ない。34は坏身、35は甕の口縁部であるがいずれも表面の摩耗が著しい。

②中・近世の遺物（第11図）　量的には古代の遺物に比べて少ないが、包含層の年代の下限を示す資料として重要である。36は備前焼の摺鉢で、酸化炎焼成に移行する以前のものである。摺目の間隔は広く、口縁端部は内側に若干つまみ出される。37・38はともに土鍋の口縁部で、37は体部外面をタテハケ、内面をヨコハケで調整し、口縁部外面には指頭圧痕が残る。39は土鍋の脚部で、下半を欠失し、上端部には体部との接合面をとどめる。土鍋類は全形を復元できるような良好な資料は出土していない。40は灰釉陶器で、器種は判然としないが壺か瓶子の破片とも思われる。時期は近世であろうか。41は近世陶器で、高台付の皿の底部破片である。42は用途不明の土製品で、表裏・天地も不明のため実測図の方向も確実なものではない。現状ではＹ字形を呈するものの三方とも折損して本来の器形は窺えない。２カ所に円孔が穿たれ、片面には指頭圧痕が明瞭に残る。

これらのうち、40～42の近世遺物は前述した暗渠内部からの出土とみられる。したがって、この包含層の形成年代の下限は中世遺物により、鎌倉時代前半期に求められる。

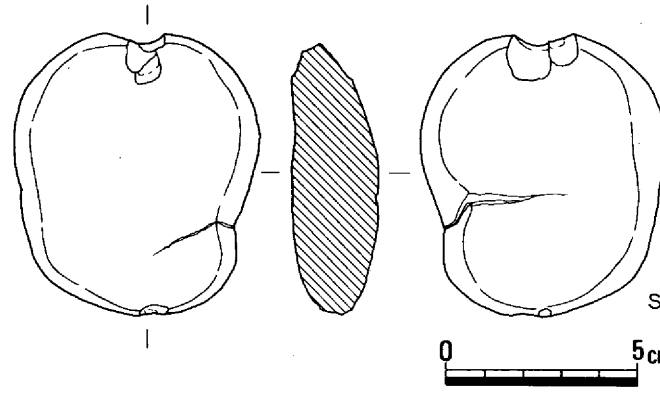


第10図　福里１区　包含層出土遺物①（１／４）



第11図　福里１区　包含層出土遺物②（１／４）

③石製品（第12図）　Ｓ１は石錘で、排土中からの採集であるが本来は包含層内にあったと思われる。偏平な円礫の長軸両端に抉りを入れた、ごく一般的な形態のものである。

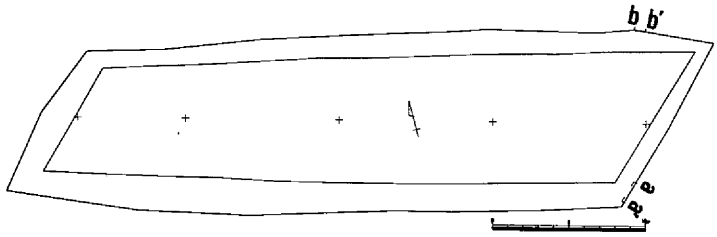


第12図　福里１区　包含層出土遺物③（１／２）

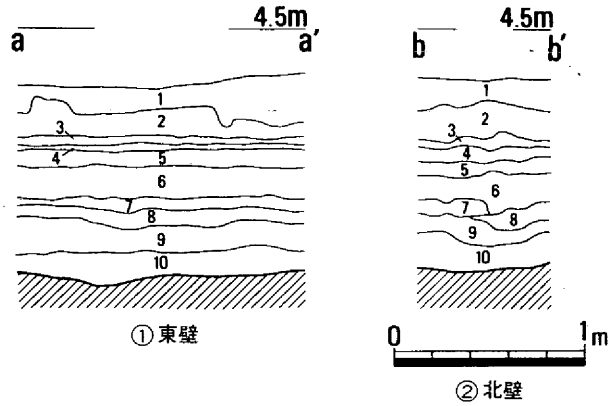
番号	口径	器高	底径	高台径	形態・手法の特徴	色　調	胎　　土
5					内面にヘラ記号あり。	淡灰色	１㎜までの長石・石英粒
6					扁平化した宝珠つまみ。	淡青灰色	0.5㎜までの長石粒
7	15.6					青灰色	0.5㎜の長石粒
8	19.8	8.8		10.4		暗青灰色	0.5～１㎜の長石粒
9	16.6	6.5		11		淡灰白色	0.5～１㎜の長石・石英粒
10	15.2					黄灰色	0.5㎜までの長石・石英粒
11				8.6		灰色	0.2～0.3㎜の長石粒
12	14	4.25		10.8		灰白色	0.5～１㎜の長石・黒色粒
13	11.8	3.45			高台内にヘラ記号あり。	灰白色	0.5～２㎜の黒色粒
14		4		9.8		淡灰色	0.5～３㎜の長石・石英粒
15				7.9		淡灰色	0.5㎜までの長石粒
16				8.4	ヘラ記号あり。	灰色	0.2～１㎜の長石・石英粒
17				7.9		淡青灰色	0.5～１㎜の長石粒
18				10.1		淡灰白色	0.5～２㎜の長石粒
19						灰白色	0.5～２㎜の長石・黒色粒
20						灰白色	0.5～２㎜の長石・石英粒
21	11.1	3.6				青灰色	0.5㎜以下の長石粒
22	12.6	3	7.6		内外面に炭素付着。	白灰色	0.5～２㎜の長石・石英粒
23	12.7	3.7				淡灰色	１㎜までの長石粒
24	12.6	3.55				淡灰色	0.5㎜以下の長石粒
25	13.9	8.8			焼成不良。	褐桃色	0.5～１㎜の長石・石英・雲母粒
26				7.1	底部は回転糸切り。	淡青灰色	0.5㎜までの長石粒
27	5.1					灰白色	精良
28						淡灰色	0.5～１㎜の長石粒
29						淡青灰色	0.5～１㎜の長石・石英粒
30	10					淡灰白色	0.5～３㎜の長石・石英粒
31				15	外面はヨコナデ。	青灰色	0.5～１㎜の長石粒
32						淡青灰色	0.5～２㎜の長石・石英粒
33	33.8					淡黄灰白色	0.5㎜までの長石・石英粒

番号	口径	器高	底径	高台径	形態・手法の特徴	色　調	胎　　土
34			8.1			明赤茶褐色	0.2～1.5㎜の長石・石英・角閃石・焼土粒
35	15.3					淡赤褐色	１㎜までの長石・石英粒
36	28.4				鎌倉時代初頭。	灰色	0.5～２㎜の長石粒・雲母
37	36.6					淡灰褐色	0.5～１㎜の長石・石英粒
38	31					茶灰褐色	0.2～１㎜の長石・石英粒
39						淡黄灰褐色	0.5～１㎜の長石・雲母粒
40					淡緑灰色の釉がかかる。	灰白色	0.2～１㎜の長石・石英粒
41				7.6	近世陶器。	赤茶褐色	0.1～0.2㎜の長石・石英粒
42					表側に２次焼成の跡か？	淡褐色	0.5～１㎜の長石・石英粒

番　号	現存長	最大幅	最大厚	重　量	残　存	形態・手法の特徴
Ｓ１	7.4	6.3	2.2	154.0	完	石材は花コウ岩。



第13図　福里２区　全体図（１／500）



1．造成土
2．青灰褐色粘質土（現代水田層）
3．灰色砂質土
4．淡黄茶褐色粘質土
5．淡黄褐色粘質土
6．淡黄灰褐色粘質土
7．淡灰色粘質土（水田層）
8．明茶褐色粘質土
9．淡茶灰褐色粘質土
10．暗茶褐色粘質土

1．2．}①に同じ
3．黄茶褐色粘質土
4．5．6．}①に同じ
7．茶褐色粘質土
8．茶褐色粘質土
9．10．}①に同じ

第14図　福里２区　調査区土層断面図（１／40）

(2)　福里２区（第13図）

１区から民家を隔てて西側約60ｍに位置する東西約46ｍの調査区である。本区では基盤層から現代造成土までの堆積状況を連続的に把握することができた。その概略は、基盤層直上に暗茶褐色包含層がのり、２枚程度の粘質土層をはさんで旧水田層（時期不明）があり、さらに数層を経て現代水田層・造成土に至るというものである。

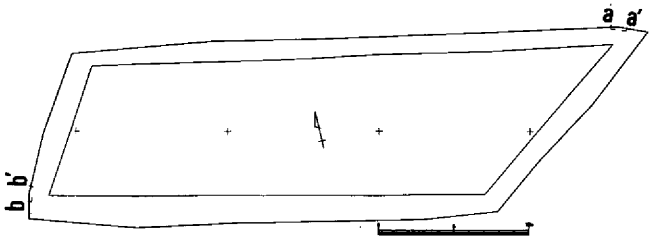
本区は１区に比べて若干高燥な箇所であるが、明瞭な遺構は検出されていない。基盤直上に黒褐色土の詰まったリング状の窪みが１基存在するが、これは風倒木痕と思われる。沖積地での検出例は少ないもので、土師東４区でも２基検出した。埋土中より弥生土器か土師器と推定される土器片が１点のみ出土したものの、細片のため図示は不可能である。時期については即断できないが、後述する福里４区や土師東遺跡の遺構と近接する可能性もある。

その他、調査区東半部分で小ピット状の窪みが若干検出されたが、これも１区のものと同じく遺構とは見なしがたい。

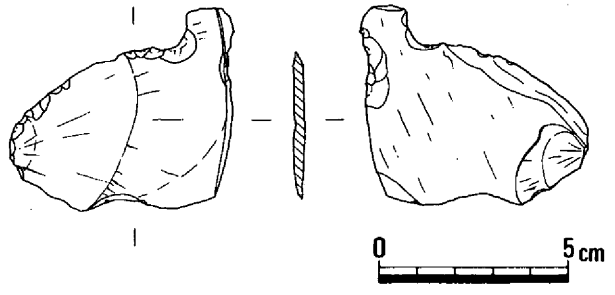
(3)　福里３区（第15図）

水路をはさんで２区の西隣に設定した東西約40ｍの台形の調査区で、基本層序は２区とほぼ共通する。本区でも２区同様明確な遺構は認められず、早い段階で削平を受け消滅したか、もともと遺構密度の薄い箇所であると考えられる。２・３区とも比較的高燥で居住条件は良好と思われるにもかかわらず遺構が検出されないことは、後者の可能性を強く示唆していよう。

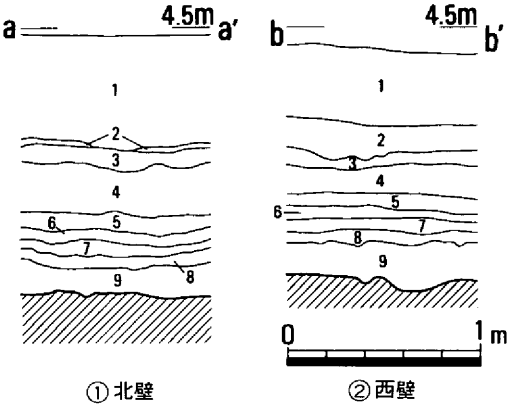
Ｓ２（第17図）は、調査区内を清掃中に基盤層上面で採集された石匙である。素材面を広く残し、粗い剝離によってつまみ部を作りだしている。石材はサヌカイトで全体に摩耗が進行している。本区の遺物はこれ１点のみであった。



第15図　福里３区　全体図（１／500）



第17図　福里３区　出土遺物（１／２）



１．造成土	１．
２．暗青灰褐色粘質土（現代水田層）	２．
３．淡黄茶褐色粘質土	３．　①に同じ
４．淡黄灰褐色粘質土	４．
５．淡灰色粘質土（水田層）	５．
６．明茶褐色粘質土	６．
７．青灰褐色粘質土	７．黄茶褐色粘質土
８．暗茶灰褐色粘質土	８．淡茶灰褐色粘質土
９．黒褐色粘質土（包含層）	９．①に同じ

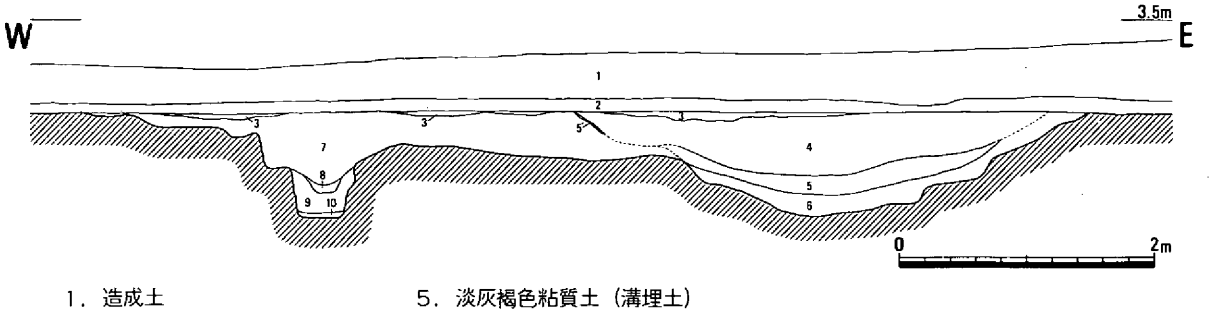
第16図　福里３区　調査区土層断面図（１／40）

番　号	現存長	最大幅	最大厚	重　量	残　存	形態・手法の特徴
Ｓ２	5.2	5.9	0.3	13.8	欠	

(4)　福里３・４区間水門設置箇所　法面調査部分（第18図）

福里３・４区の中間に干田川に流入する水路があり、合流地点のやや手前に水門が新設されている。水門と合流点の間は工事によって東側が大きく抉り込まれ滞水状態となっていたが、その北岸の法面に遺構の断面を確認したため、法面を東西９ｍにわたって清掃して遺構を検出するとともに、露出した遺物の採取を行った。

調査部分の東半部では溝の断面を検出した。上面での幅約４ｍ、深さ80cm程度を測り、他の調査区の溝と比較してかなり規模の大きいものである。埋土は褐色系の粘質土を基調とし、弥生土器片を少量含んでいた。また、溝の西側に１基、溝に先行して掘削されたと思われる土壙か柱穴の断面が認められた。上面での直径は約50cm、壁面はほぼ垂直で深さ約40cmを測り、底面は平坦である。埋土中から遺物の出土はなかった。



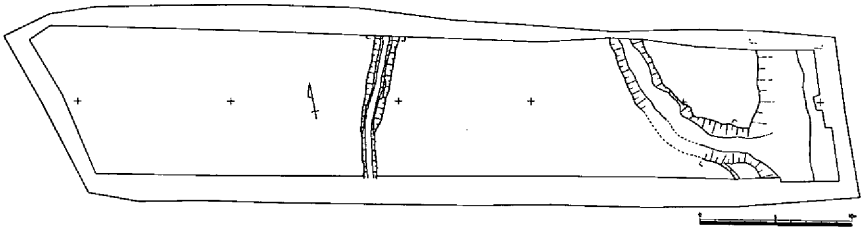
１．造成土	５．淡灰褐色粘質土（溝埋土）	
２．灰褐色粘質土（水田層）	5'．淡灰色砂質土（　〃　）	８．暗黒灰褐色粘質土（土壙埋土）
３．黄褐色粘質土	６．黒褐色粘質土（　〃　）	９．茶褐色砂質土（　〃　）
４．黒灰褐色粘質土（溝埋土）	７．暗灰褐色粘質土	10．白　色　砂（　〃　）

第18図　福里３・４区間水門設置箇所法面　土層断面図（１／60）

遺構の時期については、溝からは弥生土器片の出土があり、かつ埋土の特徴が福里４区の弥生後期～古墳初頭の溝（後述）に類似することから、ほぼ並行とみても大過あるまい。

(5)　福里４区（第19図）

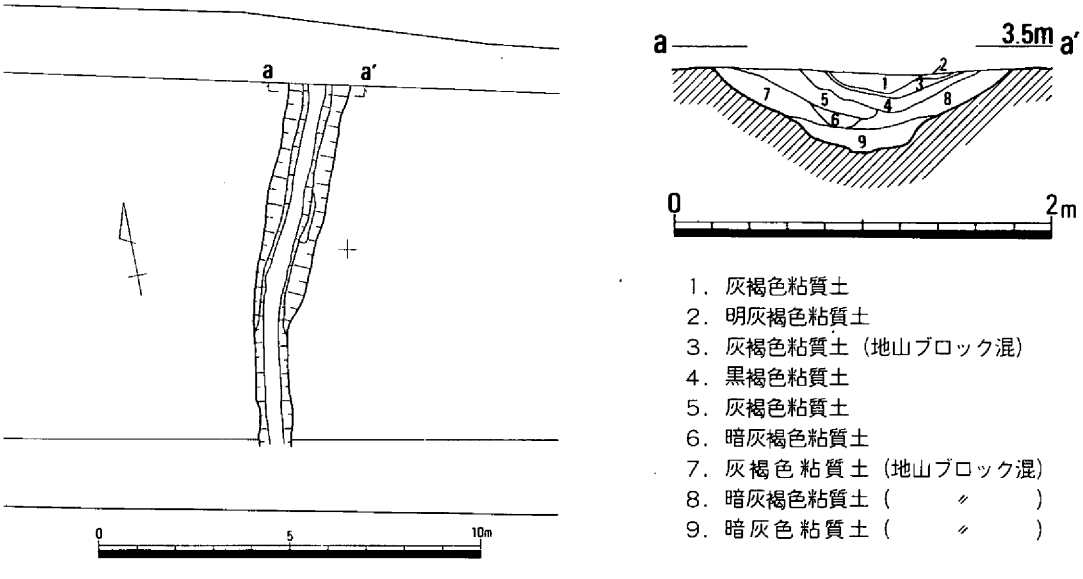
先の水路の西側約20mに設定した東西約56mの調査区である。本区では現代の削平が激しく壁面での堆積状況の観察は不可能であった。遺構は西半部で溝１条、東端部で溝１条と自然河道、その上層で柵列状遺構を検出した。東端の溝と河道埋土上半からはまとまった量の遺物が出土し、大形の破片も散見される。以下それらについて詳述する。



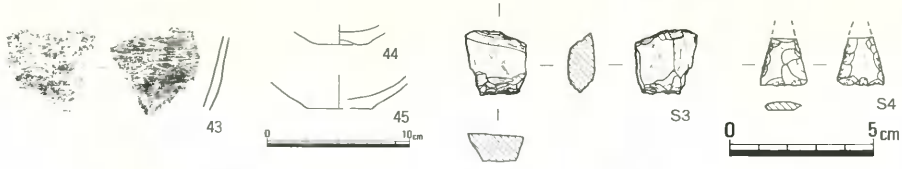
第19図　福里４区　全体図（１／500）

溝１（第20図）　調査区西半部は比較的高燥な場所であるが、それだけに削平の影響を被りやすかったのか残存していた遺構はこの溝１条のみであった。調査区を横断して北から南へ流下しており、調査区中央部で東方に緩く屈曲する。断面形は三角形に近い台形で北半部では壁面に段を有する。残りが良いと思われる北半部での幅は1.5m前後を測り、深さは最深部で50cm程度である。埋土は褐色系の粘質土が主体を占め、下層では地山の黄褐色土ブロックが多量に混入している。

埋土中から少量の遺物が出土しており、第21図にその主なものを示した。43・44は縄文土器である。43は後期の深鉢の胴部片と思われるが上下は不明である。44は晩期の深鉢の底部。45は弥生土器で後期に比定され、この溝の掘削時期の上限を示す遺物である。Ｓ３は、台形の剝片の両端に刃部をつけた楔形石器である。刃部には使用による潰れが観察できる。Ｓ４は平基無茎式の石鏃で、先端を欠失するが二等辺三角形を呈するものであろう。主要剝離面をそのまま残し、両側縁に両面から打撃を加えて刃部としている。



第20図　福里４区　溝１平面・断面図（１／200、１／40）

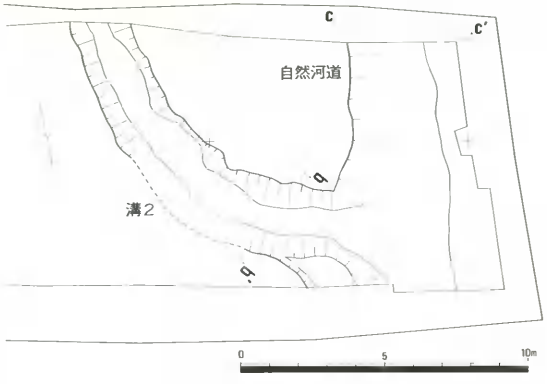


番号	口径	器高	底径	形態・手法の特徴	色調	胎土
43					黄茶褐色	長石・石英・雲母糧
44				縄文土器	淡黄茶褐色	0.5～２㎜の石英、0.1～１㎜長石
45			4.5	内外面調整不明	淡黄灰色	0.5～2.5㎜の石英、0.1～１㎜長石

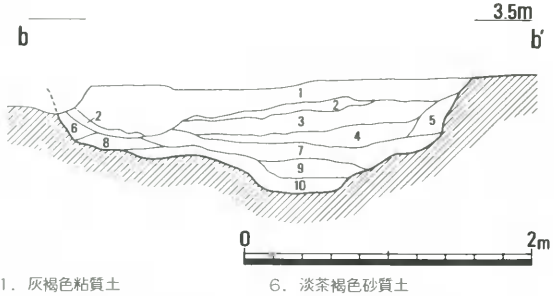
番号	現存長	最大幅	最大厚	重量	残存	形態・手法の特徴
Ｓ３	2.3	2.2	0.9	5.84	完	石材はサヌカイト。
Ｓ４	1.7	1.7	0.3	0.97	欠	石材はサヌカイト。

第21図　福里４区　溝１出土遺物（１／４、１／２）

溝２（第22・23図）　調査区東端部の自然河道に合流する溝である。検出範囲では、北壁から発して円弧を描きつつ東方に転じ、河道の西岸に接続する状況が観察された。幅は北壁付近では２ｍ前後、合流点では2.5ｍ程度を測り、深さは40㎝内外でほぼ一定である。断面形は不整な台形を呈し、壁面には部分的に段をもつ。埋土は茶褐色～灰褐色系の粘質土を基調とし、最下層には黄褐色地山ブロックが多く混入した灰褐色粘質土が堆積している。埋土中から各種土器類が出土しており、時期的には弥生時代後期から古墳時代初頭のものが主体を占める。１区の溝と違い接合可能な大形破片も目につくことから単なる後世の流入とは思われず、溝の埋没時期を示すものと解釈できる。



第22図　福里４区　溝２・河道平面図（１／200）

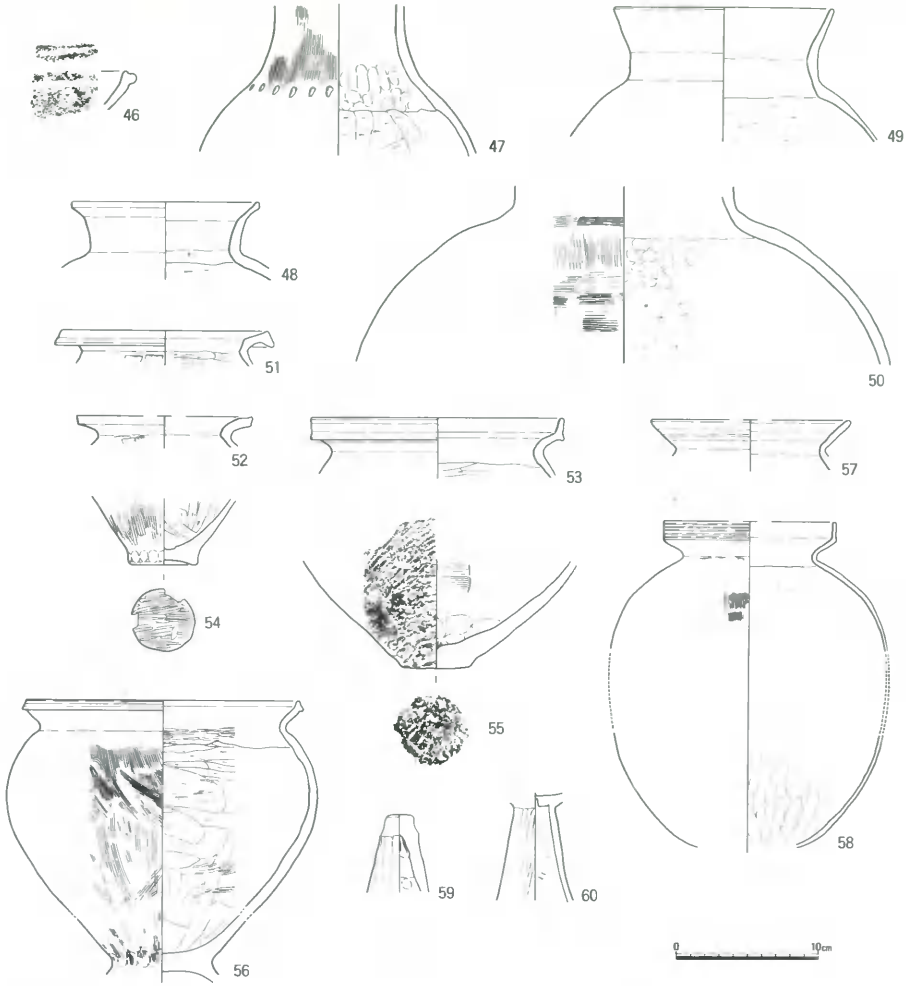


1．灰褐色粘質土
2．淡橙灰褐色粘質土
3．暗茶褐色粘質土
4．茶灰褐色粘質土（地山ブロック混）
5．暗茶灰褐色粘質土
6．淡茶褐色砂質土
7．暗灰褐色粘質土
8．淡黄茶褐色砂質土
9．灰褐色粘質土（地山ブロック混）
10．暗青灰褐色粘質土（　　）

第23図　福里４区　溝２断面図（１／40）

第24図に主要な出土遺物を示す。46は縄文土器で、後期の深鉢の口縁部である。端部上面および外面の口縁直下にはそれぞれ１条の沈線が巡っている。

47～56は弥生土器。うち47～50は壺である。47は長頸壺の頸部から肩部にかけての破片で、肩部には１列の刺突文を巡らす。48・49は短頸壺である。内面は肩部と頸部の境界までヨコ方向のヘラケズリが及んでいる。50は壺の肩部破片



番号	口径	器高	底径	形態・手法の特徴	色調	胎土
46				縄文土器	淡黄灰褐色	長石・石英・雲母粒
47					淡黄茶褐色	長石・石英・雲母粒
48	13				淡灰茶褐色	0.5～３㎜の長石・石英粒
49	15.5				淡橙褐色	0.5～２㎜石英、長石粒多い
50					淡橙色	0.5～２㎜の長石・石英粒
51	15.2				淡黄灰褐色	長石・石英・雲母粒
52	12.2				褐灰色	0.5～２㎜の長石・石英粒
53	17.4				黄茶褐色	長石・石英・雲母粒
54			4.4		灰褐色	0.1～0.5㎜雲母、0.2～1.5㎜長石
55			4.8		灰褐色	0.5～２㎜長石・石英粒
56	13.9				淡黄灰白色	長石・石英・雲母粒
57	13.8				淡黄褐色	長石・石英・雲母粒
58	12.2				淡褐色	0.5㎜石英、長石0.5～２㎜雲母、赤色粒
59					淡茶褐色	長石、石英、雲母、赤色焼土粒
60					暗灰赤色	0.5～１㎜長石・石英、微細な雲母

第24図　福里４区　溝２出土遺物（１／４）

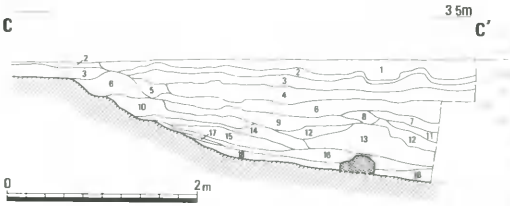
である。51～53は甕の口縁部。51・52とも口縁部が強く外反し、51は端部を垂下させている。また両者とも外面にタテハケの上端が認められる。53の口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、下方にも拡張している。54・55は甕の底部である。54の底部は上げ底で、一方向のヘラミガキが施される。55は胴部・底部外面にタタキメが明瞭に残り、内面にはヘラケズリがみられないなど際立った特徴を示す。底部内面の中央部分には成型時のシボリメをとどめ、その周囲には指頭圧痕が認められる。内面調整にはヨコハケを用いたようである。56は台付鉢である。胴部と脚部が分離して出土し、同一個体とみられたが接合しなかったため図上で想定復元した。外面はタテハケ、内面はヘラケズリののちヘラミガキで調整するが全体に摩耗気味でやや不明瞭である。口縁端部は上下に引き出され、端面はヨコナデされている。

57～60は土師器である。57はほぼ直線的に開く甕の口縁部で、外面には煤が付着している。58はいわゆる「吉備甕」で、直立する口縁部外面には櫛描文が施される。器表の摩耗が著しいが、胴部外面にはわずかに残ったタテハケが観察できる。59・60は高坏の脚柱部である。どちらも外面をタテ方向のナデで調整しており、遺存状態のよい60の内面にはヨコナデの跡がみられる。

自然河道（第22・25図）　調査区の東端で検出された、南から北に緩やかに流下する自然河道である。西岸部のみの検出のため幅は不明で、深さは1.1～1.4mを測るが、調査区外の中央部ではさらに深くなるものと思われる。堆積状況は１区の河道とほぼ共通し、上半は褐色系の粘質土、下半は灰色系の粘土が主体となり、河底には流木が遺存していた。最上層は河道の埋没がかなり進行した時点で堆積した茶灰褐色土で、土師器・須恵器等が出土している。またこの層の直下の黄褐色や灰褐色の粘質土層からは弥生土器の出土をみた。最下層の灰色系粘土層からは遺物の出土はない。

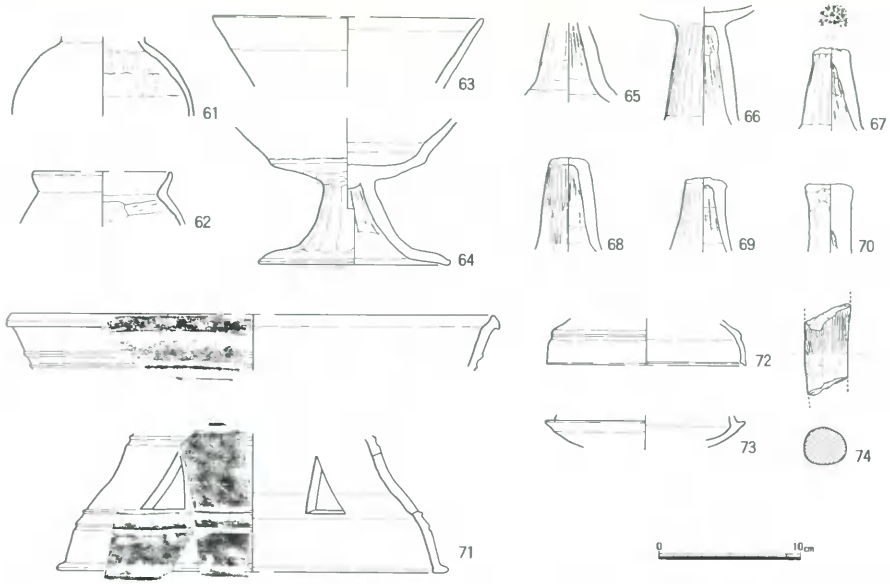
第26図に最上層の茶灰褐色土層からの出土遺物のうち、土師器・須恵器の主要なものを図示した。61～70は土師器である。61は壺の肩部で、内面に指頭圧痕を残す。62は甕の口縁部で、端部は外反ののち若干上方に屈曲する。63は高坏の坏部と思われる。64の高坏は口縁部を除いてほぼ全形を推定しうる。脚柱部は大きく開き、緩やかに脚裾部へとつながっている。坏部には段を有する。胎土・坏部内面の色調は63と類似し、本来は同一個体であった可能性もある。65～69は高坏の脚部である。いずれも外面にタテ方向のナデが施され、内面にシボリメがみられる。67は内面に粘土の巻き上げ痕をとどめ、また坏部との接合部分には不定方向の刻み目を入れる。70は残存状態が悪いが、内面にわずかにシボリメが認められることから高坏脚部と考えている。

71～73は須恵器である。71は器台で、同一個体と思われる小破片が多数出土しているが全形を復元するには至らなかった。外面は波状文で飾られ、脚部には三角形の透かし窓が切られる。72・73は坏蓋および坏身であるがどちらも小片である。72の蓋は体部と天井部の境が弱く突出し、口縁端部内面には段を有するなど６世紀前半の特



1．灰褐色粘質土
2．明茶褐色粘質土
3．茶灰褐色粘質土
4．黄褐色粘質土
5．暗灰褐色粘質土
6．淡灰色粘質土（地山ブロック混）
7．暗灰色粘質土
8．淡黄茶褐色粘質土
9．暗灰色粘質土（地山ブロック混）
10．暗灰褐色粘質土（地山ブロック混）
11．黄褐色粘質土
12．暗灰褐色粘土
13．灰色粘土（地山ブロック混）
14．暗茶灰褐色粘質土（〃）
15．黄灰褐色粘質土
16．淡緑灰色粘土
17．黄褐色粘土
18．暗灰色粘土

第25図　福里４区河道断面図（１／60）

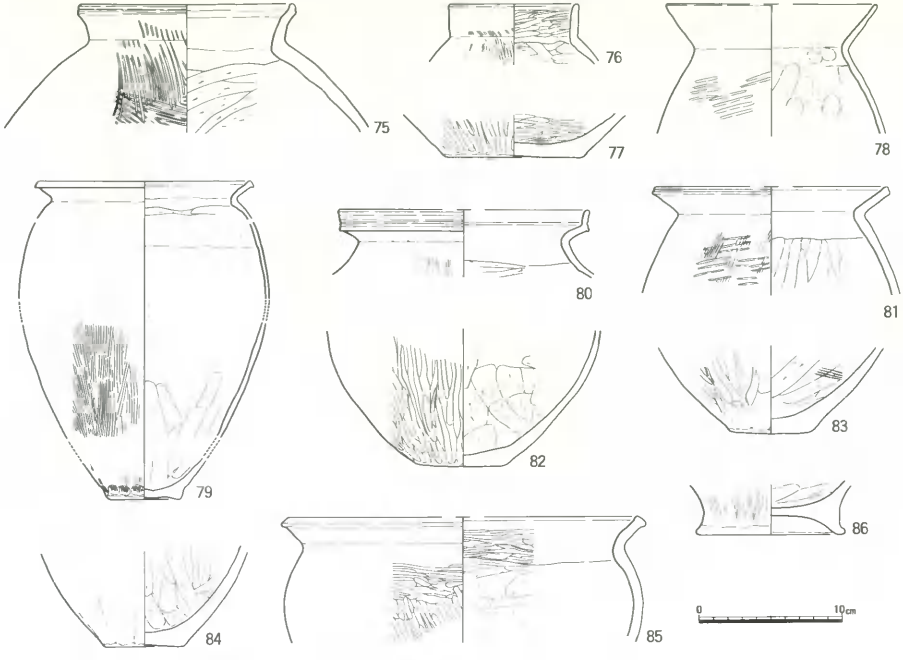


番号	口径	器高	底径	形態・手法の特徴	色　調	胎　　土
61				弥生土器？	淡黄灰褐色	0.5～1.0㎜石英、0.1～２㎜長石
62	9.5				淡黄灰褐色	長石・石英・雲母粒
63	20.6				淡赤茶褐色	長石・石英・雲母・赤色粒
64			13.4		淡赤茶褐色	長石・石英・雲母粒
65					淡黄茶褐色	長石・石英・雲母粒
66					赤茶褐色	長石・石英・赤色焼土粒
67					淡茶灰褐色	長石・石英・雲母粒
68					淡黄白灰色	0.1～0.5㎜長石、雲母粒わずかに含
69					淡黄茶褐色	0.5～1.5㎜石英、長石と赤色焼土粒
70					淡赤茶褐色	長石・石英・雲母粒
71	33.4		27.4		淡青灰色	0.1～１㎜の長石・石英粒
72	14				淡灰褐色	0.1～0.5㎜石英、0.1～１㎜長石
73					淡青灰色	やや粗
74					黄茶褐色	長石・石英・雲母粒

第26図　福里４区　河道出土遺物①（１／４）

徴をもつ。74は土鍋の脚部で、古代以降と推定され本層の遺物中では最も時期の下るものである。

第27図は最上層下の褐色系粘質土層から出土した弥生土器である。75～77は壺である。75は外面に太く間隔の広い、特徴的なハケメが施される。76は短頸壺で、口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部内面と肩部にはヘラミガキが残る。77はわずかに上げ底気味の壺の底部である。内外面ともやや幅の広いヘラミガキで調整する。78～84は甕である。78は逆ハの字状に直線的に開く口縁部をもち、内面はナデとユビオサエのみでヘラケズリが認められず、外面に平行タタキメを残すなど特異な様相を示す。79は出土時にはほぼ原形を保っているかに見えたが（図版参照）、脆弱なため取り上げの際に破損し、また実際の残存率は半分以下と低かったので全形復元は断念し、図上での想定復元にとどめた。したがって復元器高はやや不確実である。倒卵形に近い胴部を有し、口縁端部は若干下方に拡張する。胴部下端の指頭圧痕は何かを指に装着していたのか、内部に擦痕状の条線を有する。外面の下半部には煤が多量に付着している。80は口縁部が上方へと大きく拡張を見せる、後期後半に通有な形態である。81は外面をタタキののち弱いハケメで調整し、内面をタテ方向にヘラケズリするもので、



番号	口径	器高	底径	形態・手法の特徴	色　調	胎　　土
75	14.8			外面はハケメ。	淡黄褐色	長石・石英・赤色粒・その他
76	8.8			口縁外面はヘラミガキ。	淡黄灰褐色	長石・石英・雲母粒
77			9.1		淡黄灰褐色	0.3～２㎜石英、0.1～２㎜長石
78	14.5			胴部内面指頭圧痕。	淡灰褐色	長石・石英・雲母粒
79	14.9	22.5	4.8	外面胴部中央に炭化物付着。	明茶褐色	長石・石英・赤色粒
80	17.6				赤茶褐色	0.5～１㎜石英、0.1～１㎜長石、赤色粒
81	17.1				淡黄灰褐色	0.5～２㎜石英、0.1～1.5㎜長石等
82			6.5	底面にヘラ削りあり。	淡黄褐色	長石・石英・雲母粒
83			5.1		淡黄灰褐色	長石・石英・雲母・角閃石？粒
84			5.4		黄灰褐色	長石・石英・雲母粒
85	20.6				淡茶褐色	長石・石英・雲母粒
86			10.4	底面に指頭圧痕。	淡黄灰褐色	0.5～２㎜石英、0.1～2.5㎜長石

第27図　福里４区　河道出土遺物２（１／４）

あまり類例を見ない。82～84は甕の底部である。82は内面をヘラケズリし、外面はやや粗いヘラミガキで仕上げており、底部から胴部下半にかけて黒斑が入る。83の外面はタテハケののちに粗いタテ方向のヘラミガキを施している。83・84の胴部下端には成形時の稜線が残る。85は鉢の口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁端部は上下に拡張を見せる。外面および口縁部内面にはヘラミガキが明瞭に残る。86は台付鉢の脚台部である。

以上の弥生土器は河道の埋没過程において付近から投棄されたものであろう。時期はおおむね後期後葉の範囲におさまり、河道と溝２の存続時期は重複すると考えられる。

柵列状遺構（第28図）　河道および溝２の埋没後に掘削された、東西方向に列をなす不整な長円形の土壙群である。深さは残りの良いもので20㎝前後を測り、底面には数カ所の窪みが見られる。検出状況から柵列かそれに類する施設の痕跡と判断しているが、直接の根拠となる木片等の遺物は出土しておらず、また具体的に何を区画していたのかも不明である。埋土中から若干の土器片が出土した

が、周囲からの混入である可能性が高く、遺構の時期判定の手がかりとするには問題がある。ここでは、河道および溝２の最上層に直接掘りこまれている状況からみて、両者の埋没後さほど時を経ない時期に設置されたと判断したい。具体的な年代は与えがたいが、古代の範疇で捉えられよう。

第28図に埋土内出土遺物を示す。87の弥生土器甕は

番号	口径	器高	底径	形態・手法の特徴	色　調	胎　　土
87	14.4				淡褐色	0.5mmの長石・石英・雲母粒
88	12.8				黄茶褐色	0.1～0.1mm長石、雲母
89			3.1		淡黄灰褐色	長石・石英・雲母粒

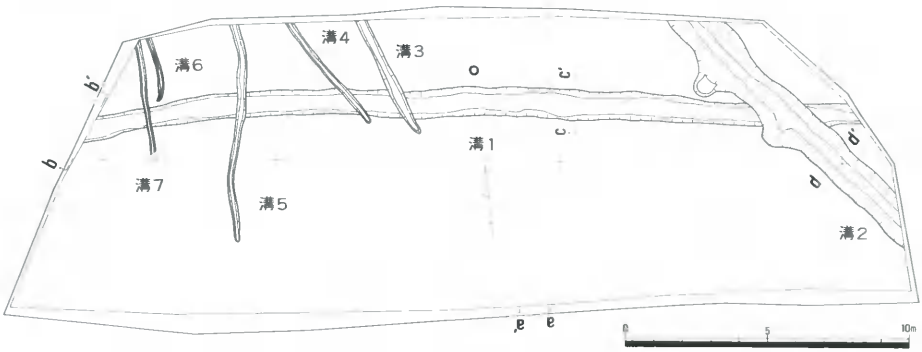
第28図　福里４区　柵列状遺構（１／200）・出土遺物（１／４）

形態・色調等が溝２出土の51に酷似している。同一個体ではないが明らかに混入遺物である。88は弥生土器か土師器かはっきりしないが、やや内傾する甕の口縁部である。89は古墳時代前期に比定される製塩土器の脚部。

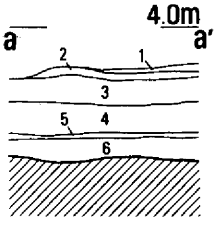
第２節　土師東遺跡

(1)　土師東１区（第29図）

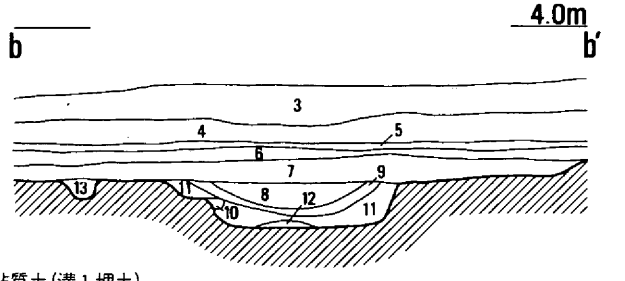
北方へ張り出す木鍋山の尾根を境に字名が変わり、遺跡名も土師東遺跡となるが、その性格・存続時期は福里遺跡とほぼ同一とみられる。本区は木鍋山の西麓を北流して干田川に流入する水路の西側に設定した東西約32mの台形の調査区で、土師東遺跡内ではもっとも上流側にあたる。現代の削平・造成により土層の残存状態は良好とはいえないが、全般的な傾向は福里遺跡と変化はないものと思われ、基盤層上の暗茶褐色粘質土層（包含層）や旧水田層も残存していた。遺構としては溝が７条検出されている。

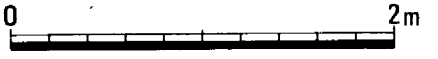


第29図　土師東１区　遺構配置図（１／200）



①南壁

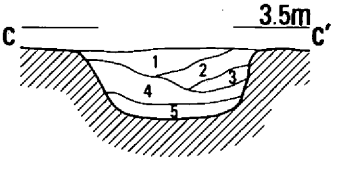




②西壁（溝１）

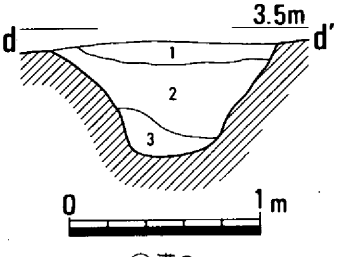
1．淡灰橙色粘質土(現代水田層)
2．淡灰褐色粘質土
3．淡灰褐色粘質土(水田層)
4．淡灰褐色粘質土
5．淡橙灰色粘質土
6．灰褐色粘質土(水田層)
7．淡灰褐色粘質土(　〃　)
8．茶褐色粘質土(溝１埋土)
9．淡黄褐色粘質土(溝１埋土)
10．黄褐色粘質土(　〃　)
11．暗灰褐色粘質土(　〃　)
12．灰色砂質土(　〃　)
13．淡灰褐色粘質土

第30図　土師東１区　調査区土層断面図（１／40）



①溝１

1．茶褐色粘質土
2．暗黄褐色粘質土
3．暗茶褐色粘質土
4．黄褐色粘質土
5．黒褐色粘質土



②溝２

1．淡灰褐色粘質土
2．淡灰色粘土
3．淡青灰色粘土

第31図　土師東１区溝１・２断面図（１／40）

溝１（第29・30・31図）　土師東１区から３区にかけて、緩く蛇行しつつ西流する溝である。本区では最も良好に遺存しており、中央やや北寄りを調査区とほぼ平行に約28mにわたって貫流している。幅は１m前後でほぼ一定、深さは最深部で約40cmを測り、断面は台形を呈する。埋土は茶褐色粘質土を基調とする。この溝は福里１区のものと異なり包含層下から基盤層に掘り込まれているので、時期は古代以前と推定できる。埋土中から縄文土器・弥生土器の細片が少量出土しており、上限は弥生後期であろう。第31図に２点の縄文土器片を示す。90は深鉢の口縁部、91は胴部で、どちらも後期のものとみられる。

溝２（第29・31図）　調査区東端部で溝１を切って南東から北西に流下する溝で、幅は1.2m、深さは60～70cm程度である。断面は台形を呈し、他の溝と違い灰色系の粘土が堆積している。出土遺物がなく時期の判定は困難だが、包含層上から掘削され、また埋土の質が他と著しく異なること等から、近世以降の所産と判断したい。

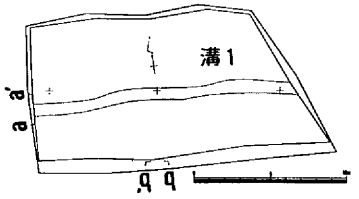
第32図　土師東１区溝１出土遺物（１／４）

溝３・４・５・６・７（第29図）　調査区西半部で溝１を切って南北に走る浅い溝である。いずれの溝も幅20～40cm、深さ10cm前後を測り、暗茶褐色～暗灰褐色の粘質土で埋まる。出土遺物はないが、１区の溝と同様一応中世以降と考えている。

番号	口径	器高	底径	形態・手法の特徴	色調	胎土
90				縄文土器。	淡黄灰色	長石・石英・雲母粒
91				縄文土器。	黄茶褐色	長石・石英・雲母粒

(2)　土師東２区（第33図）

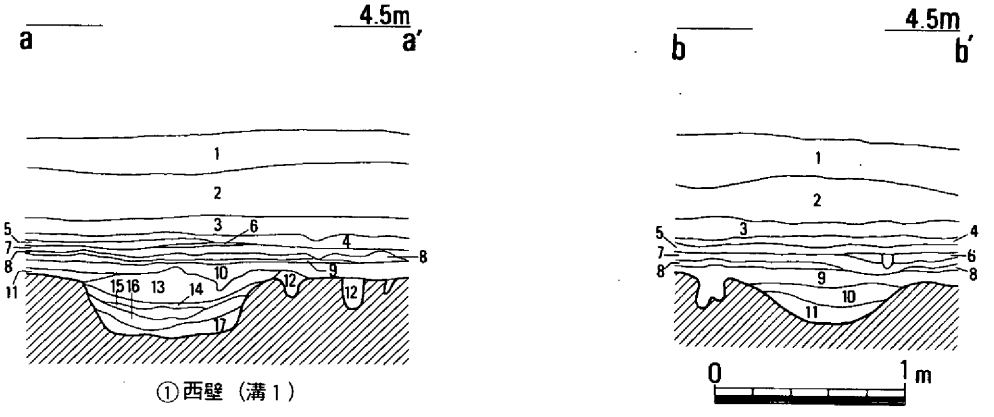
１区の西方に設定した、東西約20mの台形の調査区である。基本的な層序は他の調査区と変化はなく、現代水田層と暗茶褐色包含層間に３枚程度の旧水田層が認められる。本区では１区の溝１の続きを検出した。



第33図　土師東２区　全体図（１／500）

溝１（第33・34図）　１区から続いて西流する溝である。残存状態は良くなかったが東西両壁で断面を確認することができた。断面の形状は１区と同じく台形で、埋土は色調がやや黒味を増す。基盤層上面にわずかに残存した埋土の黒褐色土から想定されるおよその流路を点線で示した。この溝を含め調査区内から遺物は出土していない。

このほかに、調査区南壁で別の遺構の断面を確認した（第34図②）。平面形態は不明である。



①西壁（溝１）

②南壁

１．造成土
２．淡黄灰褐色粘質土
３．青灰褐色粘質土(水田層)
４．明茶褐色粘質土
５．淡黄茶褐色粘質土
６．黄茶褐色粘質土
７．茶灰褐色粘質土
８．淡黄灰褐色粘質土
９．淡灰褐色粘質土(水田層か)
10．淡黄茶褐色粘質土
11．暗茶褐色粘質土(包含層)
12．暗灰褐色粘質土
13．暗茶灰褐色粘質土(溝１埋土)
14．暗灰褐色粘質土(　〃　)
15．灰褐色粘質土(　〃　)
16．黒褐色粘質土(　〃　)
17．暗灰褐色粘質土(　〃　)

１．造成土
２．淡黄灰褐色粘質土
３．青灰褐色粘質土(水田層)
４．明茶褐色粘質土
５．暗茶灰褐色粘質土
６．暗黄褐色粘質土
７．茶灰褐色粘質土
８．暗黄茶褐色粘質土
９．暗茶褐色粘質土(包含層)
10．暗茶灰褐色粘質土
11．茶灰褐色粘質土
(地山ブロック混)

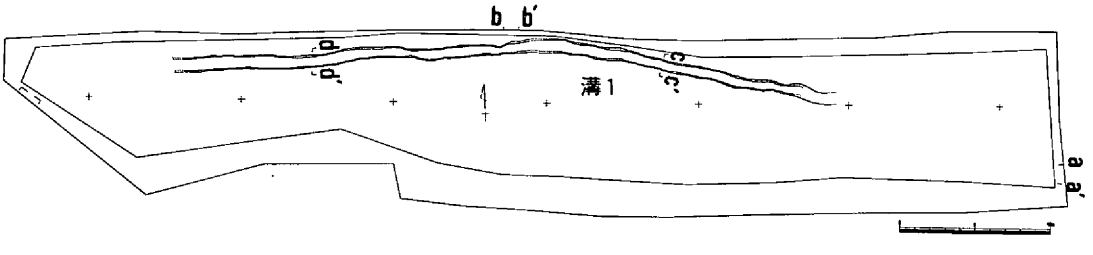
第34図　土師東２区　調査区土層断面図（１／40）

(3)　土師東３区（第35図）

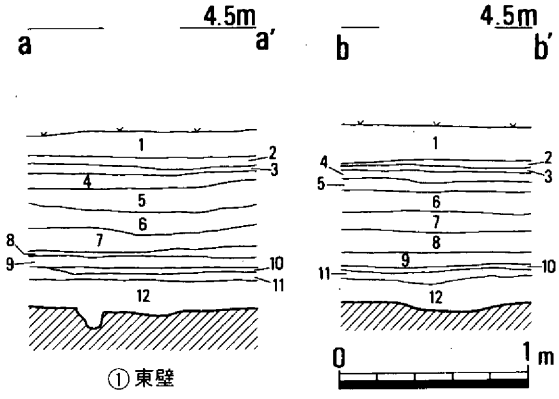
２区よりさらに下流側に設けた東西約70mの調査区である。壁面で土層堆積状況が詳細に観察でき、旧水田層や暗茶褐色包含層を確認した。検出遺構は１・２区から続く溝１条だけである。

溝１（第35・37図）　１・２区の溝の続きで、調査区中央北半部で約43mにわたって検出している。流路は東半部では西北西を指し、中央部で緩く屈曲してほぼ真西に向かう。残存状態は悪く、東西両端および検出部分の上半を削平によって失い、また壁面においても撹乱のためか断面は確認できていない。埋土は茶褐色粘質土を基調とし、縄文・弥生土器の小片とサヌカイト片が少量出土した。

この溝のほかに遺構はなく、樹根の痕跡とおぼしい不定形の土壙状の窪みが１基、溝の南側に認められた。



第35図　土師東３区　全体図（１／500）

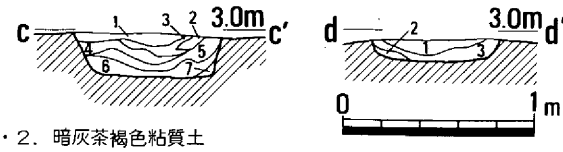


①東壁　②北壁

1．青灰色粘質土（現代水田層）
2．淡橙灰色粘質土
3．淡灰橙色粘質土
4．淡灰橙褐色粘質土
5．淡灰褐色粘質土
6．淡褐灰色粘質土
7．灰褐色粘質土
8．淡灰橙褐色粘質土
9．淡灰褐色粘質土
10．淡灰色粘質土
11．淡灰褐色粘質土
12．茶褐色粘質土（包含層）

1．
2．
3．
4．
①に同じ
5．淡灰橙褐色粘質土
6．淡灰褐色粘質土
7．淡褐灰色粘質土
8．灰褐色粘質土
9．淡灰橙褐色粘質土
10．淡橙灰色粘質土
11．淡灰橙色粘質土
12．①に同じ

第36図　土師東３区　調査区土層断面図（１／40）



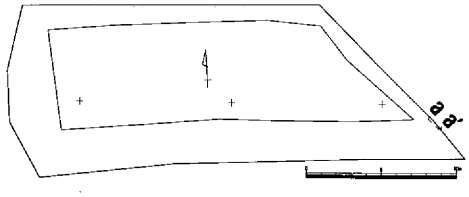
1・2．暗灰茶褐色粘質土
3．暗灰黄褐色粘質土
4．暗灰茶褐色粘質土（地山ブロック混）
5．暗灰茶褐色粘質土
6．暗灰黄褐色粘質土
7．黒灰色粘土

1．暗灰茶褐色粘質土
2．淡灰黄色粘質土
3．暗灰褐色粘質土

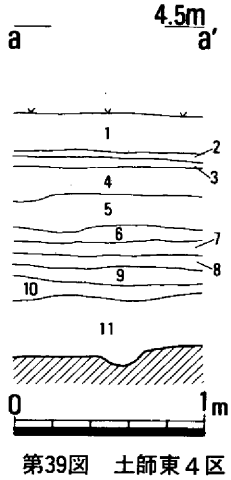
第37図　土師東３区　溝１断面図（１／40）

(4)　土師東４区（第38図）

３区と水路をはさんで隣接し、今回の調査範囲の西端つまり最も下流側に掘削した、東西約30mの台形の調査区である。１～３区で検出した溝１の続きは確認されず、他の遺構も全く存在しなかった。遺構以外では、福里２区のものと似たリング状の風倒木痕が２基確認された。調査区内から遺物の出土はなく、排土中から弥生土器の小片が採集された程度である。　（岡本）



第38図　土師東４区　全体図（１／500）



1．青灰色粘質土（現代水田層）
2．橙灰色粘質土
3．淡橙灰色粘質土
4．淡灰橙色粘質土
5．淡灰橙褐色粘質土
6．淡灰褐色粘質土（水田層か）
7．灰褐色粘質土（水田層）
8．灰褐橙色粘質土
9．淡灰橙褐色粘質土
10．淡灰褐色粘質土
11．茶褐色粘質土（包含層）

第39図　土師東４区　調査区土層断面図（１／40）

第4章　まとめ

確認調査・立会調査時の知見から、両遺跡は河川流路に沿って形成された微高地上に立地し、弥生・古墳時代の集落址を含む遺構が良好な状態で存在することが予測されていた。しかし全面調査に着手してみると、予想に反して両遺跡とも遺構密度は極めて希薄であり、検出遺構も中世以降のものが大半を占め、出土した遺物も少量にとどまった。従って遺構の性格や変遷、あるいは遺構相互の関係等には不明な点が多い。そこでまず検出遺構の少ない理由から考えてみると、主として二つの要因が挙げられよう。

第一は、単純に削平によって消滅したとする見方である。本文中にも記した通り、いずれの遺跡においても基盤の直上に古代～中世の暗茶褐色包含層が乗っている。このことから、この層の形成が一回ないし数回の整地・削平に伴うものと見ることはあながち不合理ではなく、その際に基盤上の弥生・古墳時代の遺構は削られたのかもしれない。

第二に、調査範囲が遺跡の中心部を外れているという可能性が指摘できる。調査区内では2条の自然河道が検出されたが、福里遺跡4区の河道上層が遺物を含んでいたにすぎず、その他には遺物が検出されていない。また、削平を受けて流出した包含層の遺物は少なかった。福里遺跡2・3区のような微高地上と想定される場所では、風倒木痕しか存在しなかった。

このことから、土師東遺跡・福里遺跡ともに、遺跡の中心部は調査区の北側で、調査区内と南側は密度の薄い部分であったと考えられる。

次に、限られた情報からではあるが当遺跡の性格・消長について考えてみたい。まず、最も時期の溯る遺物としては、福里1・4区と土師東1・3区で出土した縄文土器（前・後・晩期）がある。いずれも溝への流入で、遺跡の初源と直接関係を有するかは不明だが、縄文遺跡の分布の希薄な当地域にあって、この近辺に同時代の遺跡が存在することをほのめかす資料である。当遺跡で確実に人間活動の痕跡を辿れるのは弥生時代後期に至ってである。この時期に帰属する遺構は福里4区の溝2、可能性のあるのは同区の溝1と土師東1～3区の溝1で、性格は不明ながら意図的な掘削であることは間違いない。先に検討したように、集落の中心部は調査区外にあり、調査区内とその周辺は川が流れ樹木が点在する、集落の縁辺部にあたる場所だったのであろう。古墳時代初頭にこれら遺構が埋没して後、両遺跡全域にわたって暗茶褐色粘質土が堆積する。遺物の出土が福里1区西端に集中していることは、何らかの人為的な要因を感じさせ、程遠からぬ位置に集落遺跡の存在が想定できる。その後は断続的に水田が営まれ、現在に至っている。

以上、調査の成果に憶測を交えつつ遺跡の様相を粗描してみた。今回の調査では顕著な遺構の検出はみなかったとはいえ、調査地の至近に集落址等の存在する可能性は極めて高く、今後の開発行為に際してはその点に十分留意する必要があると思われる。　（氏平・岡本）

写 真 図 版

福里１区　河道西岸と溝１、
溝４～６
（東から）

福里１区　河道東岸と溝７～９
（南から）

福里３区
（東から）

福里４区　柵列状遺構

（北から）

福里４区　溝２

（北から）

福里４区　溝２断面

（西から）

福里４区　河道

（東から）

福里４区　河道出土遺物

（西から）

福里４区　溝１

（北から）

福里４区　溝１断面

（南から）

土師東１区

（東から）

土師東３区

（東から）

1

4

13

23

27

5

10

16

6

11

17

8

12

21

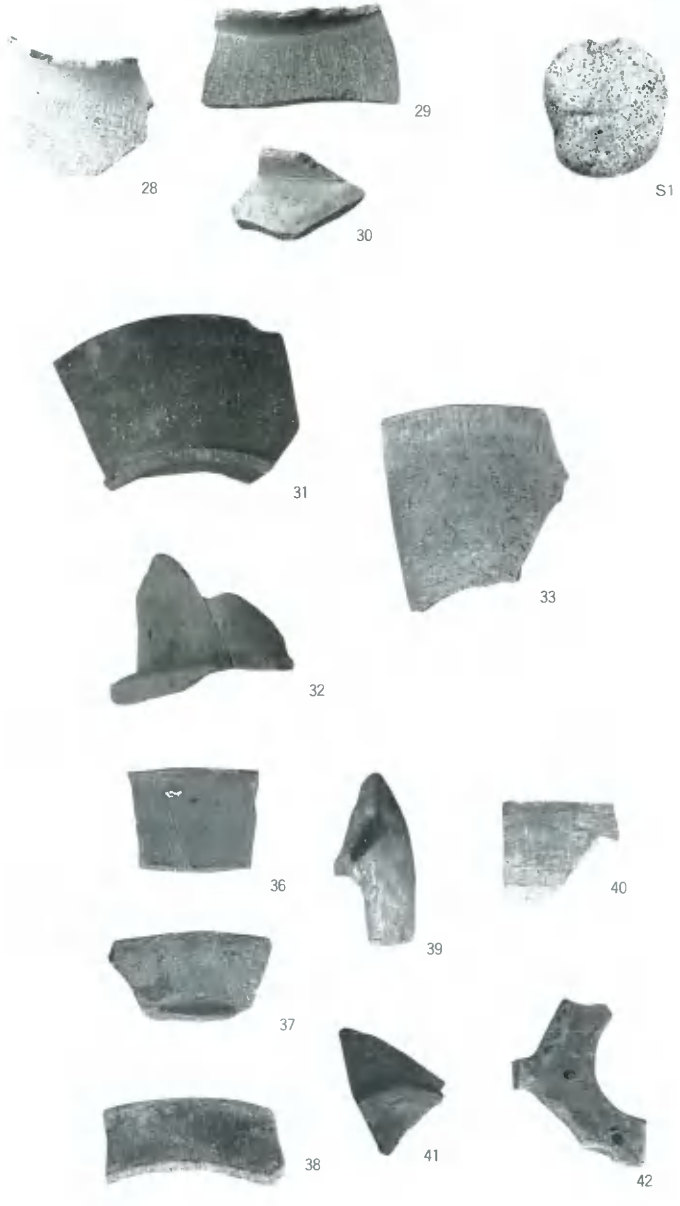
25

7

19

26

試掘時出土遺物・福里１区包含層出土遺物１



福里１区包含層出土遺物２

福里４区溝２出土遺物・福里４区河道出土遺物１

71

75

78

81

82

86

福里４区河道出土遺物 2

報告書抄録

ふりがな	はじひがしいせき・ふくさといせき
書名	土師東遺跡・福里遺跡
副書名	干田川改修に伴う発掘調査
巻次	1
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	95
編著者名	氏平昭則・岡本泰典
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701-01　岡山県岡山市西花尻1325-3　TEL 086-293-3211
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒700　岡山県岡山市内山下2-4-6　TEL 086-224-2111

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　95

土師東遺跡・福里遺跡

干田川改修に伴う発掘調査

平成６年11月20日　印刷
平成６年11月30日　発行

編　集　岡山県古代吉備文化財センター

発　行　岡山県教育委員会

印　刷　友野印刷株式会社